

上野遺跡

金剛宝戒寺東側における発掘調査報告書

1990

大分市教育委員会

序 文

九州の東玄関口に位置する大分市は古代以来、常に歴史的に重要な役割を演じてきたところです。今回実施しました上野遺跡を含む上野台地でも百済系の古代瓦が出土して古代寺院の存在が推測されるところであり、また、中世を通じて豊後守護の大友氏の居館が設えられ豊後の政治的要地として注目されるところです。

しかし、これまで上野台地における遺跡の発掘調査例は少なく、この地域を解明するための考古資料が不十分であったわけですが、今回の調査によってその一端をうめる事ができたのは大変有意義な事です。

本報告により、この遺跡の具体的な姿を市民の皆さんにご理解いただき、文化財保護への関心が高まる一助となれば幸いです。なお、調査にあたりご協力いただきました関係者の方々、ならびに本書の発行にご協力いただいた関係者各位に深く感謝の意を表します。

平成3年5月18日

大分市教育委員会

教育長 安 東 裕

例 言

1. 本書は大分市教育委員会がタナベ工業株式会社の委託を受けて実施した、大分市上野に所在する遺跡の発掘調査報告である。
2. 発掘調査はタナベ工業株式会社の宅地造成に伴い、大分市教育委員会が調査主体となって、平成2年7月より実施した。
3. 発掘調査にあたっては、タナベ工業株式会社の全面的な協力を得た。
4. 本書の執筆は調査を担当した池邊千太郎がおこなった。
5. 遺構の実測は担当者、および調査補助員があたった。なお、写真撮影は担当者がおこなった。
6. 遺物の実測は担当者がおこない、拓本は佐藤小夜（大分市教育委員会社会教育課文化財室主任）、園田まゆみ（大分市教育委員会社会教育課文化財室臨時職員）の協力を得た。
7. 製図については担当者がおこなった。
8. 遺物の整理は渡辺里美・宮崎里美・淵野玲子（大分市教育委員会社会教育課文化財室臨時職員）があたった。
9. 遺物の写真撮影は担当者がおこなった。
10. 遺物番号は本文・挿図・図版で一致する。
11. 本書の編集は担当者がおこなった。

目 次

第Ⅰ章 はじめに	1
第1節 調査の経緯	1
1、調査に至る経過	1
2、調査組織	1
第2節 遺跡の立地環境と周辺の遺跡	2
第Ⅱ章 調査の結果	5
第1節 調査の概要	5
1、調査区の設定	5
2、基本層序	5
第2節 遺構	7
SK－03	7
SK－06	7
SK－08	8
SK－10	8
SK－11	9
SK－12	9
SK－13	9
SK－17	9
SK－35	10
SD－01	10
SD－02	10
SE－01	11
第3節 遺物	15
1、瓦	15
2、土師器	15
3、弥生土器～古式土師器	25
4、備前産 摺鉢	25
5、須恵器・土師器	25
第Ⅲ章 まとめ	30

挿 図 目 次

第1図	上野遺跡周辺遺跡分布図(1/25000)	3
第2図	調査地位置図(1/2500)	4
第3図	グリット設営図(1/600)	5
第4図	遺構配置図(1/150)	6
第5図	SK-03 平面・断面実測図(1/30)	7
第6図	SK-06 平面実測図(1/20)	7
第7図	SK-08 平面・断面実測図(1/40)	8
第8図	SK-10 平面・断面実測図(1/30)	8
第9図	SK-11 平面実測図(1/30)	9
第10図	SK-13 平面実測図(1/30)	9
第11図	SK-35 断面実測図(1/60)	10
第12図	SE-01 平面・断面実測図(1/40)	11
第13図	SD-01 平面・断面実測図(1/60)	13
第14図	上野遺跡出土遺物実測図(1)・平瓦	16
第15図	上野遺跡出土遺物実測図(2)・平瓦・軒平瓦	17
第16図	上野遺跡出土遺物実測図(3)・平瓦・軒平瓦・丸瓦	18
第17図	上野遺跡出土遺物実測図(4)・軒丸瓦・丸瓦	19
第18図	上野遺跡出土遺物実測図(5)・丸瓦	20
第19図	上野遺跡出土遺物実測図(6)・軒丸瓦・丸瓦	21
第20図	上野遺跡出土遺物実測図(7)・丸瓦	22
第21図	上野遺跡出土遺物実測図(8)・丸瓦	23
第22図	上野遺跡出土遺物実測図(9)・土師杯・皿	24
第23図	上野遺跡出土遺物実測図(10)・弥生土器・古式土師器・紡錘車・土錘・刀子	26
第24図	上野遺跡出土遺物実測図(11)・備前産摺鉢	27
第25図	上野遺跡出土遺物実測図(12)・備前産摺鉢	28
第26図	上野遺跡出土遺物実測図(13)・須恵器・土師器	29

表 目 次

表1	遺物観察表(1)	32
表2	遺物観察表(2)	33
表3	遺物観察表(3)	34

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査の経緯

1. 調査に至る経過

大分駅の南側約1 kmに位置する上野台地には、上野遺跡と称する周知遺跡が上げられており、遺跡の重要さは前々より指摘されていた。平成2年5月に上野台地において民間業者の宅地造成が計画され、事前の文化財調査のために職員派遣を依頼された。大分市教育委員会では、上野台地における遺跡の重要性から試掘調査によって遺跡の規模と性格をつかむため、平成2年6月5日から8日にかけて試掘調査を実施した。試掘は東西方向に幅4メートル、長さ10m程のトレンチを2本設けた。その結果、古代から中世における遺構・遺物がトレンチ全体より発見された。このため大分市教育委員会では業者との間で協議を重ねた結果、建物が建つ所においては記録保存をすることにし、平成2年7月9日から発掘調査を開始した。

2. 調査組織

調査主体者 大分市教育委員会 教育長 安東 裕
事務局

大分市教育委員会

山村 晃（大分市教育委員会社会教育課課長）

野尻政文（ 同上 文化財室室長）

秦 政博（ 同上 社会教育課主幹）

是永和英（ 同上 文化財室主査）

佐藤小夜（ 同上 文化財室主任）

調査協力 タナベ工業株式会社

調査担当 池邊千太郎（大分市教育委員会社会教育課文化財室技術員）

調査参加者 塩地潤一・兵谷有利・内野武・水野裕文・嶋田由希・渡辺久江（以上別府大学学生）、川崎真也（立正大学学生）、後藤聡（福岡大学学生）
金村時永・佐藤トミ子・佐藤シゲ子・佐藤ジョウ・清水トミカ
豊東マサエ・和田広子

整理作業員 渡辺里美・沖 有子・宮崎里美

（以上大分市教育委員会社会教育課文化財室臨時職員）

野中嗣子（大分大学学生）・松村千里（別府大学学生）

第2節 遺跡の立地環境と周辺の遺跡

上野遺跡は大分県大分市上野丘2丁目に所在する。

上野遺跡の立地する大分平野は九州の北東、大分県の中央部に位置しており北側には別府湾が広がる。この平野部には2大河川があり、九州の中央部に位置する祖母山麓や阿蘇外輪山を水源とする大野川が北流し、河口付近で広いデルタを形成する。一方、西部には由布院盆地を水源とする大分川があり、下流に行くに従い河岸段丘が広がりデルタ地帯を河口付近で発達させている。こうした自然環境により大分平野の周辺には段丘地形が広がっている。このうち上野遺跡の存在する上野丘稜面は大分川によって形成された河岸段丘であり川に沿って東西に地形が発達し標高35メートル程の低い段丘面を形成している。

上野遺跡周辺の歴史的環境をみると、古代から中世にかけての遺跡が数多く見られる。

これらを時代別に追ってみると、弥生時代においては下郡を中心とする遺跡群が展開する。この遺跡より多くの溝状遺構が検出されており、これに伴う集落の形成について今後の展望が期待される所である。また、最近泥炭層より大量の木製品が出土しており注目される。

古墳時代では、台地の東側に5世紀のものとされる前方後円墳の大臣塚古墳がある。現在、前方部が削平をうけ後円部のみが残る。後円部の直径は約40メートル、高さ約13メートルを測る。

台地上北側の金剛宝戒寺付近からは、白鳳時代の素弁蓮華文の軒丸瓦が表採されており、古代寺院の存在が推測される場所である。

平安時代から鎌倉時代にかけて凝灰岩の岩肌に磨崖石仏群が形成される。その一つが上野台地の東端の崖にみられる国指定史跡の大分元町石仏である。薬師如来坐像を中心に多聞天立像、不動明王等を配置したものである。また約500m南の同じ崖沿いには岩屋寺石仏が刻まれる。さらに約1km西方の南側斜面の崖には伽藍石仏が鎮座している。このように上野台地の崖面は一面宗教的聖地として信仰の場が営まれた所であるが、さらに平安中期には「高国府」の名称で知られるように豊後国府が台地上に営まれた可能性が高く、政治的要地として注目されることにもなったと思われる。

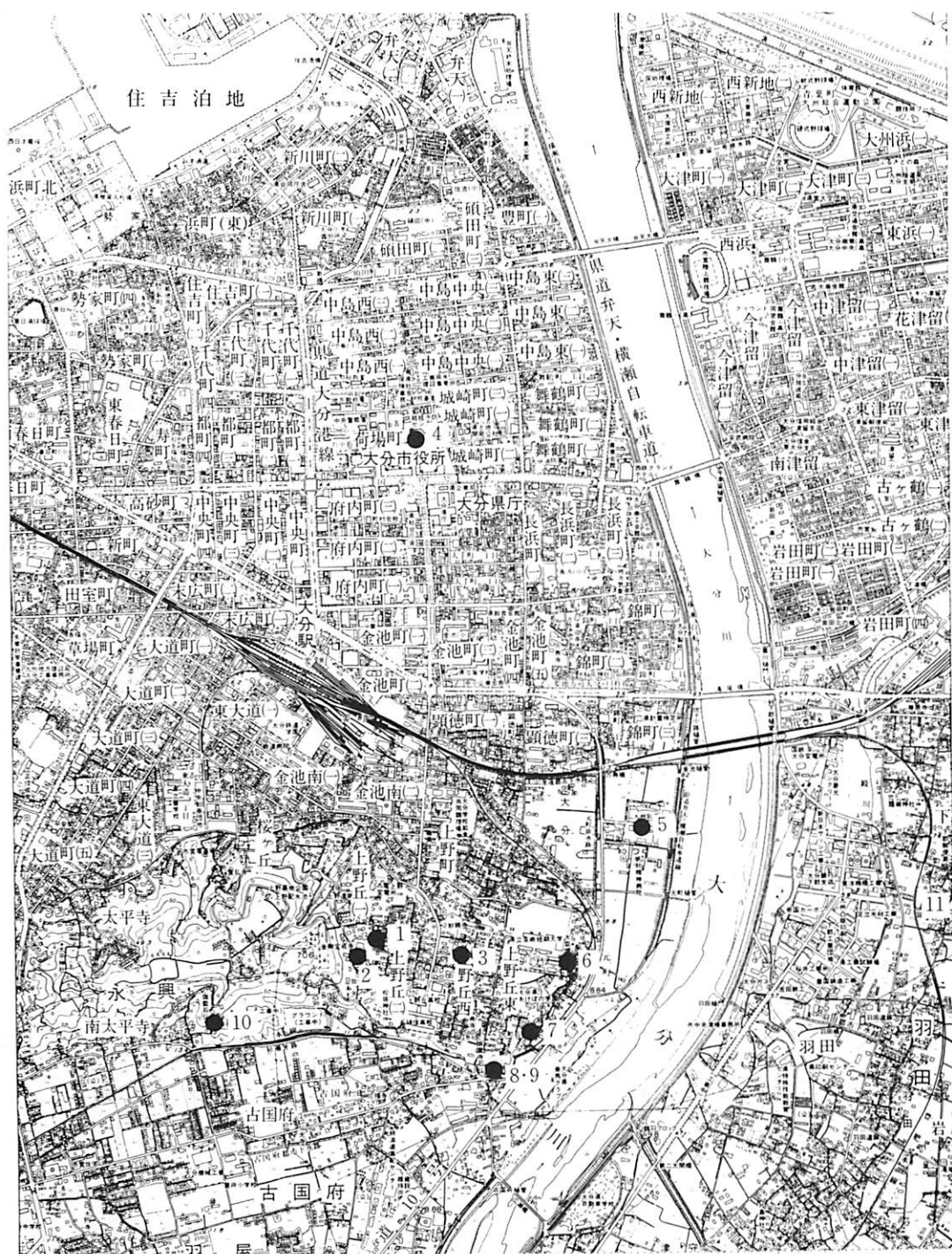
また、台地の東側平野部に大友氏（大友貞親）が府中で最初の禅寺を造営されたとされる万寿寺跡が所在する。この万寿寺跡からは当時の井戸、寺院の外堀などが確認されておりこれに伴う瓦や土師質土器が出土している。さらに上野台地の東側においても岩屋寺跡が認められる。

中世になると、台地上東側に豊後守護職を務めた大友氏の館跡が設けられることになる。館跡は南側と東側に空堀を巡らせ、その内側に土塁を築いた大規模な城郭的な形態を呈するものである。

このように、上野台地並びにその裾に広がる平野部には多数の遺跡が分布し、古代より文化の中心として発展した所である。

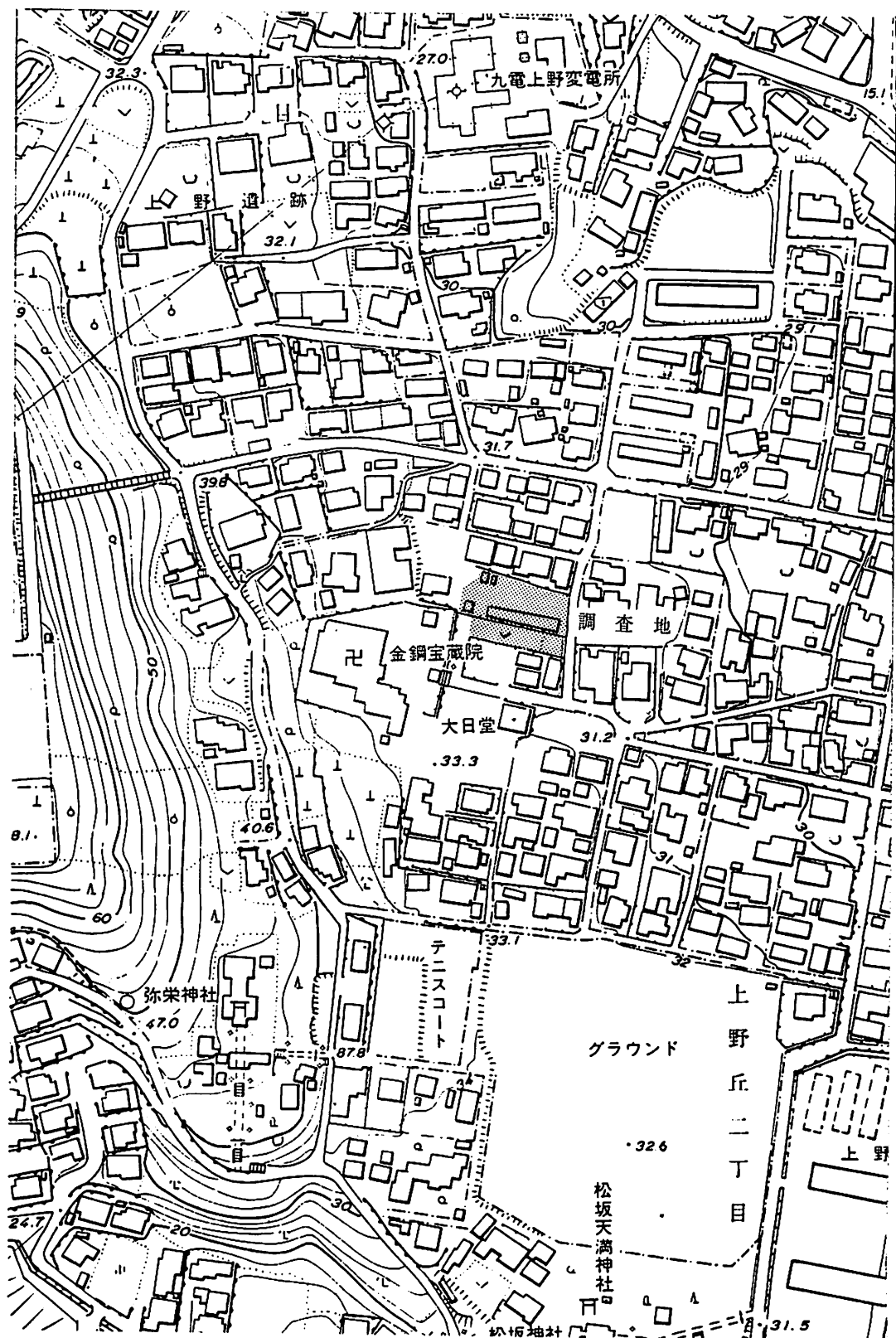
－参考文献－

『大分市史』 上巻・中巻 大分市 1987年



- | | | | |
|---------|----------|-----------|----------|
| 1. 上野遺跡 | 2. 金剛宝戒寺 | 3. 大友氏館跡 | 4. 府内城跡 |
| 5. 万寿寺跡 | 6. 大臣塚古墳 | 7. 元町石仏 | 8. 岩屋寺石仏 |
| 9. 岩屋寺跡 | 10. 伽藍石仏 | 11. 下郡遺跡群 | |

第1図 上野遺跡周辺遺跡分布図 (1/25000)



第2図 調査位置図 (1/2500)

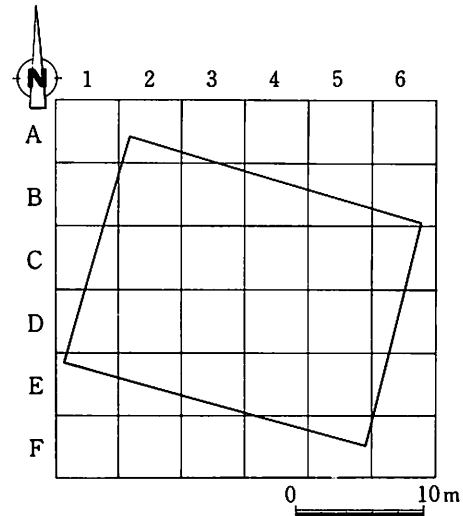
第Ⅱ章 調査の成果

第1節 調査の概要

1. 調査区の設定

上野遺跡を調査するに当たり、調査区内にグリットを設定した。調査対象区域全域は東西30m、南北27mあり、この中に磁北で5m四方のグリットを設定し、合計27に区画したもので、北から南に向かって南北軸にアルファベットでA～Fとし、西から東に向かって東西軸に数字の1～6とした。

なお、標高については800m先にある3等水準点より運んで使用した。



第3図 グリット設定図 (1/600)

2. 基本層序

地層の観察にあたり調査区の北側に現地表面より150cm程掘り下げて土層の観察を行った。

上層部では造成における削平・盛土が行われており、これにより平坦面を形成している。調査区の北側半分はアスファルトが敷かれ、駐車場として利用されていた。

以下に調査区北側に設けた地層観察トレンチより基本土層の説明を加えたい。

I 客 土

厚さ20cm程である。

II 茶褐色土層

硬質で調査区全域にわたり層を形成する。15cmの厚みをもつ。

III 暗茶黒褐色土層

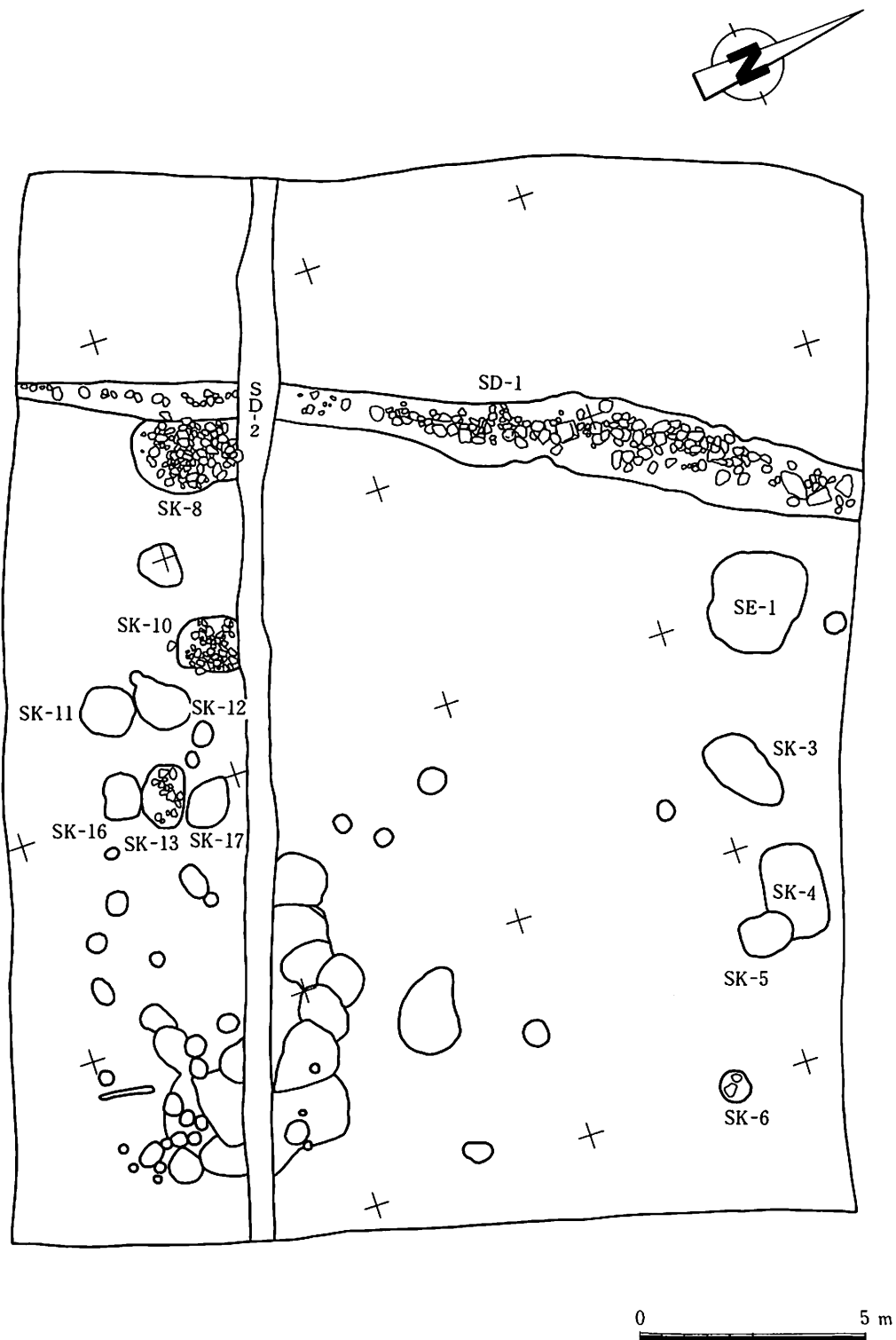
層と同様に硬質である。遺物が多数出土する遺物包含層で、20cmの厚みをもつ。

IV 黄茶褐色土層

粘性を有する層であり、粘性はそれほど強くはない。この層からは遺物の出土は認められない。14cmの厚みをもつ。

V 灰白色土層

粘性はⅦ層より強く、粘土と称する方が適切と思われる。少し前までこの付近でこの粘土を採集してレンガを焼いていたものである。この層を1m程下げると水が湧いてくるために層の厚さは確認できなかった。



第 4 図 遺構配置図 (1/150)

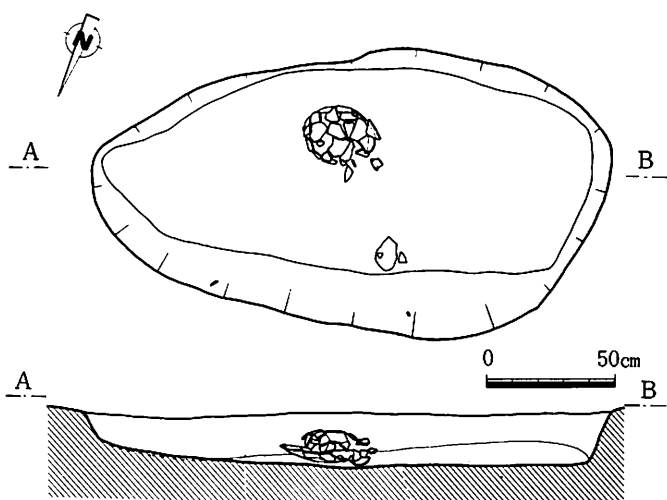
第2節 遺 構

本調査の発掘調査は平成2年7月より8月下旬にかけて行われた。発掘対象面積は840㎡に及んだ。

今回の調査により検出された遺構としては、調査区の西側で南北に延びる溝、これに直交するように東西に延びる字境いの石列、井戸が北側に1基、土塋22基である。遺物は、丸瓦・平瓦が大半を占め、SD-01の溝を中心に摺鉢・土師質土器の坏が出土している。また、弥生土器・土師器・須恵器なども数例出土した。

SK-03

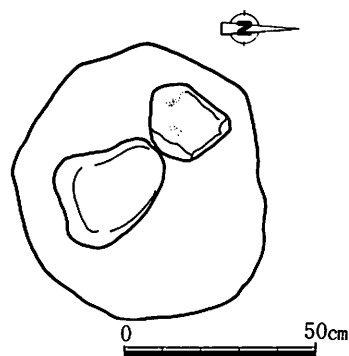
SK-03は、調査区の北側、SE-01とSK-04の間に位置する。平面形態は不整の楕円形を呈するものであり、長軸を東西に2m、短軸を南北に1.15mを測る。床面は、ほぼ平坦面を形成しており、壁面はほぼ緩やかな立ち上がりで認められる。遺物は土塋中央近から土師壺1点が出土している。土器は床面直上に横倒しになった状態で検出しており、ほぼ完形に近い状態であった。こうした形態や遺物の出土状況からすれば、土塋墓としての性格が考えられる。



第5図 SK-03平面・断面実測図 (1/30)

SK-06

SK-06は調査区の東側に位置する。平面形態は、不整形な円形を呈するもので、直径70cm程を測る。遺構内には、30×20cm大と20×20cm大の石が2点混入していた。また、石の下部より丸瓦(14)が1点出土している。検出面より床面まではほぼ20cmであり、壁面はほぼ垂直に近い形態を呈する。



第6図 SK-06平面実測図 (1/20)

SK-08

SK-08は調査区の西側に位置し、調査区の中で最も大きい土壌である。

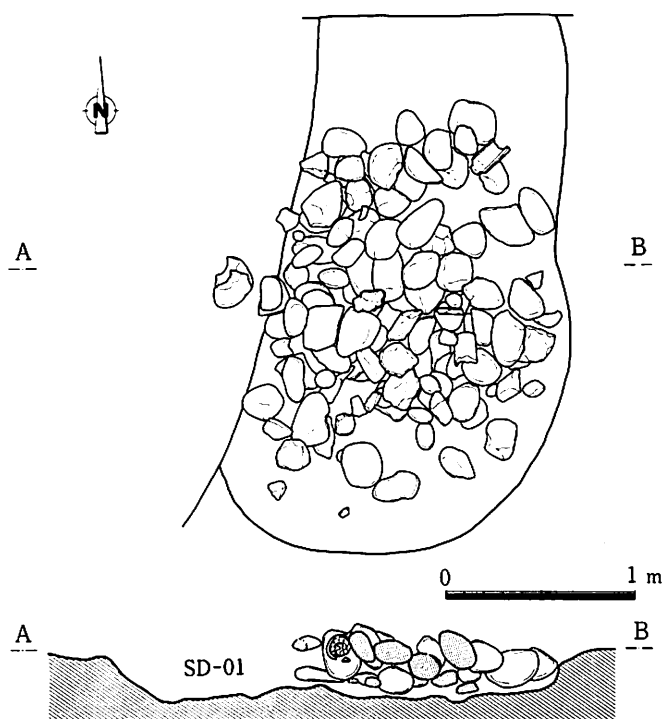
平面形態は南北に長い楕円形を呈する。土壌の西側は南北に延びるSD-01に切られており、また北側を東西に延びるSD-02に切られていることが認められる。長軸を南北にとり2.3m + d、短軸を東西にとり1.7m + dを測る。

遺構内には人頭大や拳大程の河原石が大量に詰まった状態で検出され、これに混じって丸瓦・平瓦・軒丸

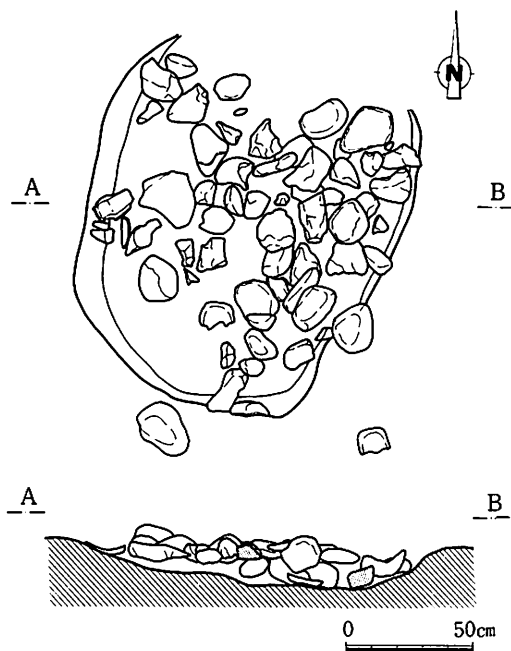
瓦・備前産の播鉢が数点出土している。遺構内の集石は、北側で床面上に遺存するが、南側では覆土の上面にあり床面よりやや浮いた状態にあった。集石の構成礫は、人頭大の河原石を中心に乱雑な状態で混入していた。遺構の床面はやや波打ち状態にあり、壁面への立ち上がり部分においては緩やであるが壁面に至ってはきつい立ち上がりで認められる。

SK-10

SK-10は調査区の西側よりにあり、SK-12の北側、SK-08の東側に位置する。平面形態はやや楕円形に近い形態を呈する。この土壌の北側は東西にのびるSD-02との切り合いが認められる。このため遺構の規模はやや不明であるが、長軸は南北で1.4m + d、短軸は東西に1.3mを



第7図 SK-08平面・断面実測図 (1/40)

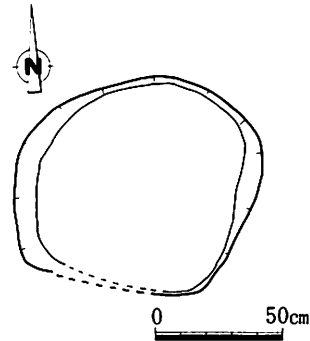


第8図 SK-10平面・断面実測図 (1/30)

測る。遺構内には、SK-08と同様に人頭大や拳大の河原石が多数検出しており、これに伴い丸瓦が混在していた。河原石と瓦とが折り重なる状況にあることや、堆積土層内に、焼土やカーボンが検出していることから、河原石や瓦などの遺物は遺構内に廃棄した状態と考えられる。土壌内の集石は、東側では床面直上に遺存するが、西側では覆土の上面にありやや床面より浮いた状態で認められる。遺構の掘り方において壁面部分では不明であるが、床から壁への立ち上がりは、東側ではやや丸味を持って立ち上がり、西側では緩やかな立ち上りを呈するものである。

SK-11

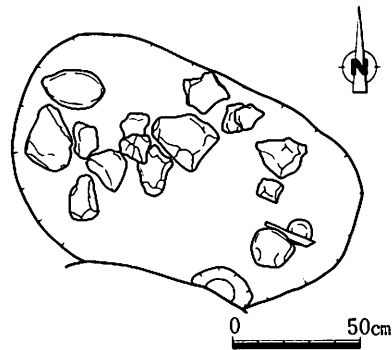
SK-11は調査区南側にあり、SK-10の南側、SK-16の西側に位置する。平面形態は不整の円形を呈する。遺構は北側においてSK-12と接している。規模は長軸を東西にとり1m、短軸を南北にとり0.85mを測る。遺構の床面はほぼ平坦であり壁面に至る立ち上がりは緩やかである。遺構内より土師質土器の壺片が出土している。



第9図 SK-11平面実測図(1/30)

SK-12

SK-12は調査区の南側に位置し、SK-10の南側、SK-13の西側に位置する。平面形態は不整の長楕円形を呈する。遺構は南側でSK-11と接する。規模は長軸を南北にとり1.4m、短軸を東西にとり1mを測る。出土遺物としては、弥生土器の高杯の脚部が認められる。



第10図 SK-13平面実測図(1/30)

SK-13

SK-13は調査区南側の中央部、SK-12の東側、SK-17の南側に位置する。平面形態は隅丸長方形に近い楕円形を呈する。遺構は南側にあるSK-16と切り合っている。遺構の規模は、長軸を東西にとり1.4m、短軸を南北にとり0.9mを測る。遺構内には人頭大の角礫が数十点検出しており、これに混じって土師質坏(48)や瓦(7)が出土している。

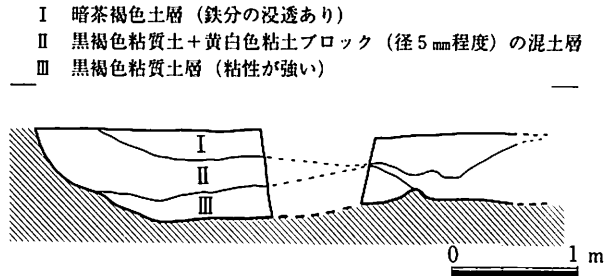
SK-17

SK-17は調査区の南側中央部、東西にのびるSD-02とSK-13との間に位置する。平面形態はほぼ楕円形を呈するものであり、長軸を東西に、短軸を南北にそれぞれ1.2m×0.9mを測る。遺構内よ

り古式土師器の壺の口縁部（66）が出土している。

SK-35

SK-35は、調査区西側に位置し、遺構の中心において南北にのびるSD-01との切り合いがみられ、遺構の北側においてSK-08との切り合いが認められる。この遺構がSD-01並びにSK-08の下部に位置することから、北東、南西方向と



第11図 SK-35断面実測図（1/60）

北西、東南方向にトレンチを設けてその規模の確認を行った。これにより長軸を北東と南西方向にとり規模が3.5m程、短軸を北西と東南方向にとり規模が4 m + dを測ることが分かった。床から壁面への立ち上がりは、緩やかなものであった。なお遺構内より須恵器（88）が出土している。

SD-01

SD-01は調査区西側を南北方向に走る溝状遺構である。遺構は、南・北側ともに調査区外に延びることが認められる。残存する溝の長さは、調査区内で南北19mを測る。溝の幅は南側では狭く、北側に行くにしたがい広くなる傾向にある。このため上面幅の狭い所では0.7m、広い所で1.6～1.8mの規模を有しており溝幅が場所によって格差が認められる。溝の底部をみると南側では床面平坦面を成しほぼ逆台形の掘り込みを示しているが、北側では壁面が緩やかであるため床面と壁面との境が明瞭に認められない。遺構内には、人頭大の河原石が全体に広がり大きいもので80cmにも及ぶものが検出している。集石は中央部分より北側に集中しており、このうち五輪塔の水輪部分もこれらに混じって検出された。遺物としては、平瓦・丸瓦と備前産の播鉢を中心に出土しているが土師質土器の坏なども数点見られた。

SD-02

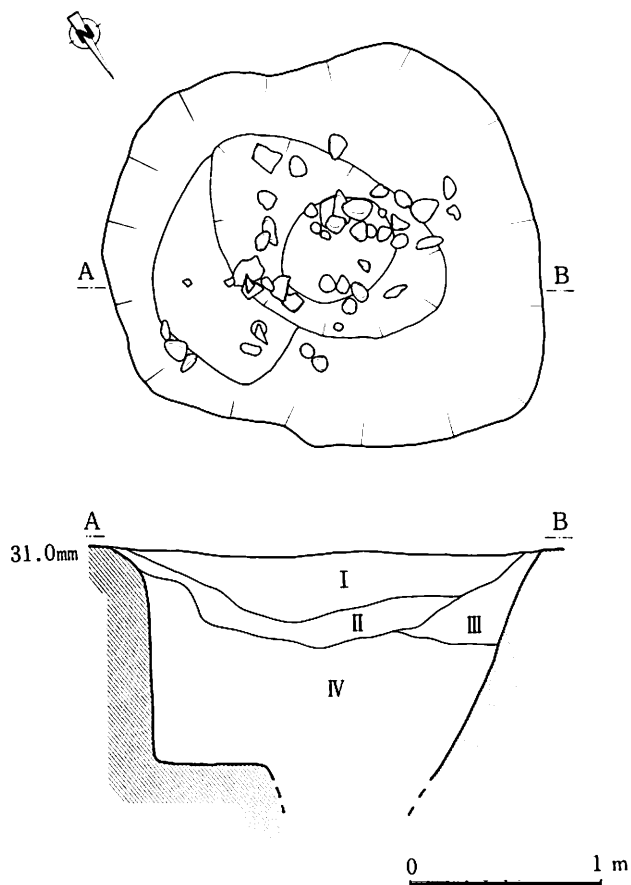
SD-02は調査区の南側を東西方向にほぼ一直線に延びる遺構であり、東西方向共に調査区外に延びており、南北にのびるSD-01との切り合いが西側で認められる。遺構の長さは調査区内で東西23.5m、幅0.5～0.7mを測る。遺構の断面は逆台形に掘り込まれ、東西に掘り込まれ部分に人頭大の河原石を一行に並べた状態で検出された。なお明治初期に作製された字図を見ると、この部分には、水路の表示が認められる。これが遺構と重なっていることから、この遺構は排水施設としての暗渠と考えられる。遺構内からは、近世の平瓦が出土している。

SE-01(SK-02)

SE-01は調査区の中央部北側に位置し、南北に延びるSD-01の東側、SK-03の西側に位置する。平面形態は不整円形を呈し、平面形の規模は、長径を南北に、短径を北東・南西方向にとり直径1.8～2.5mの規模を有する。遺構の掘り方は、上部より約1m前後が掘鉢状に開くものであり、下部は『U』字状に掘られている。そして、上部と下部との途中に段的なものが形成されており、下部を深く掘り下げる場合に作業の効率を能率的にするための手段としての構造としてとらえたい。

遺構の堆積層は、上層に軟質の淡黒色土層があり、これに混じって軒平瓦・平瓦・丸瓦が少量出土している。また、人頭大、拳大の河原石がⅡ層目の茶褐色土層にかけて投げ込まれた状態で検出されている。さらにその下層には黄白色粘土層が堆積していた。こうした上～中層で

の土器・瓦・河原石の堆積状況などからすれば、井戸の廃棄段階時に廃棄場所として利用されたと理解できる。遺構内には、木枠、石積みなどの施設は認められなかった。また、上部構造も不明である。遺物は、上層の淡黒色土層とⅡ層目の茶褐色土層より出土しており、下部の黄白色土層及び井戸の底部からは認められなかった。



- | | | | |
|-----|----|--------|-------------|
| I | 軟質 | 淡黒色土層 | (カーボンが少量混入) |
| II | 軟質 | 茶褐色土層 | |
| III | 軟質 | 淡黒褐色土層 | (粘土ブロック混入) |
| IV | 粘質 | 黄白色土層 | (粘性がかなり強い) |

第12図 SE-01平面・断面実測図 (1/40)



第13図 SD-01 平面断面実測図 (1/60)

第3節 遺物

1、瓦

瓦の出土は大半がSD-01からの物であり、SK-08がこれに続いて出土している。

瓦の種類は平瓦・軒平瓦・丸瓦・軒丸瓦等である。その大半は破片であるため図化できたのは一部となった。このうち軒平瓦・軒丸瓦の出土は数点と極めて少量であった。

軒平瓦（8）はSD-01から出土しており、瓦当文様は均正唐草文である。臼杵石仏群地域遺跡から出土している軒平瓦と比較すれば室町時代前期に該当するものである。

軒平瓦（13）はSK-02から瓦当部の端部のみ出土している。凹面は布目、凸面は横方向の平行櫛掻きを施しており、胎土は砂粒でやや軟質であり色調は内面外面共に黄橙色を呈する。

軒丸瓦（17・24・25）はSK-08からの出土である。3点共瓦当文様は左巻きの三ッ巴文と小さな連珠文との組み合わせである。内区と外区を隔てる圏線は認められるが、巴文による圏線が形成していないことから室町時代後期の所産と思われる。瓦当部にははなれ砂が使用されている。珠文数を復元すれば18～19であろう。凹面は布目を呈し凸面はナデを施している。

2、土師器

土師質土器は、SD-01の溝状遺構を中心に出土している。このうち皿は大きく4類に分類できる。

1類の44・48は口径7.8～8.0cm、器高1.8～2.5cm前後と口径が一定である。体部から中位にかけて緩やかに立ち上がり口唇部はやや薄く丸みをもっている。体部下半部分に厚みを有し、外底部は回転糸切り離した後ナデを施す。

2類の45・49は口径8.0～9.0cmを測る。体部下半部分は比較的薄く、体部から緩やかに立ち上がり口唇部は丸みをもつ。外底は回転糸切り離しのままで、内面外面共に明瞭な回転利用のナデを施す。

3類の38・39・42は底径6.4～6.6cmと一定である。底部と体部下端との境に明瞭な段を有し、体部が逆「ハ」字状を呈し直線的である。外底は回転糸切り離した後ナデを施す。

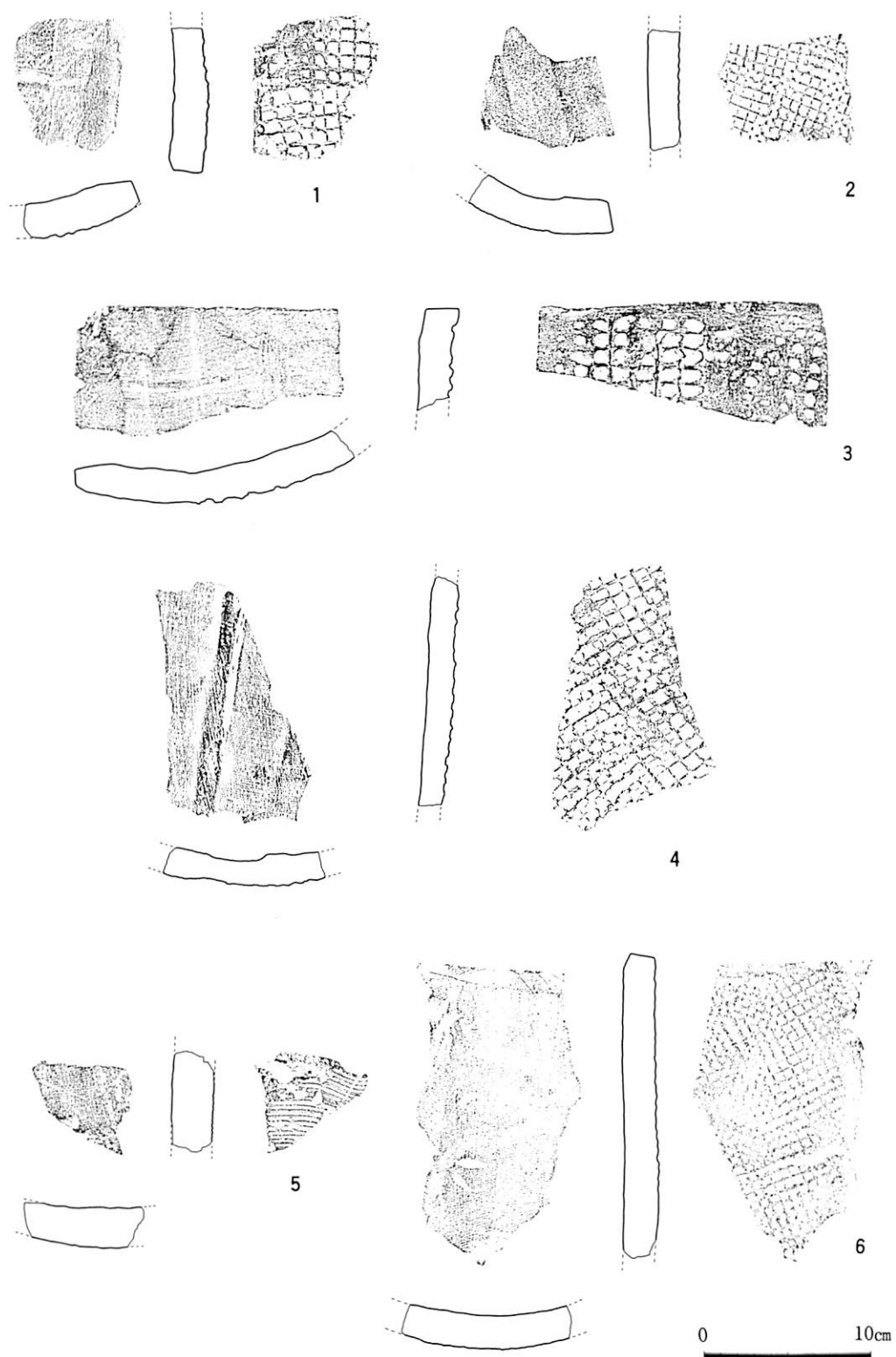
4類の51は口径10cm、底径5.0cm測る。底部と体部下端との境に明瞭な段を有する。体部はやや丸みをもって立ち上がる。

坏の方は大きく3類に分けられる。

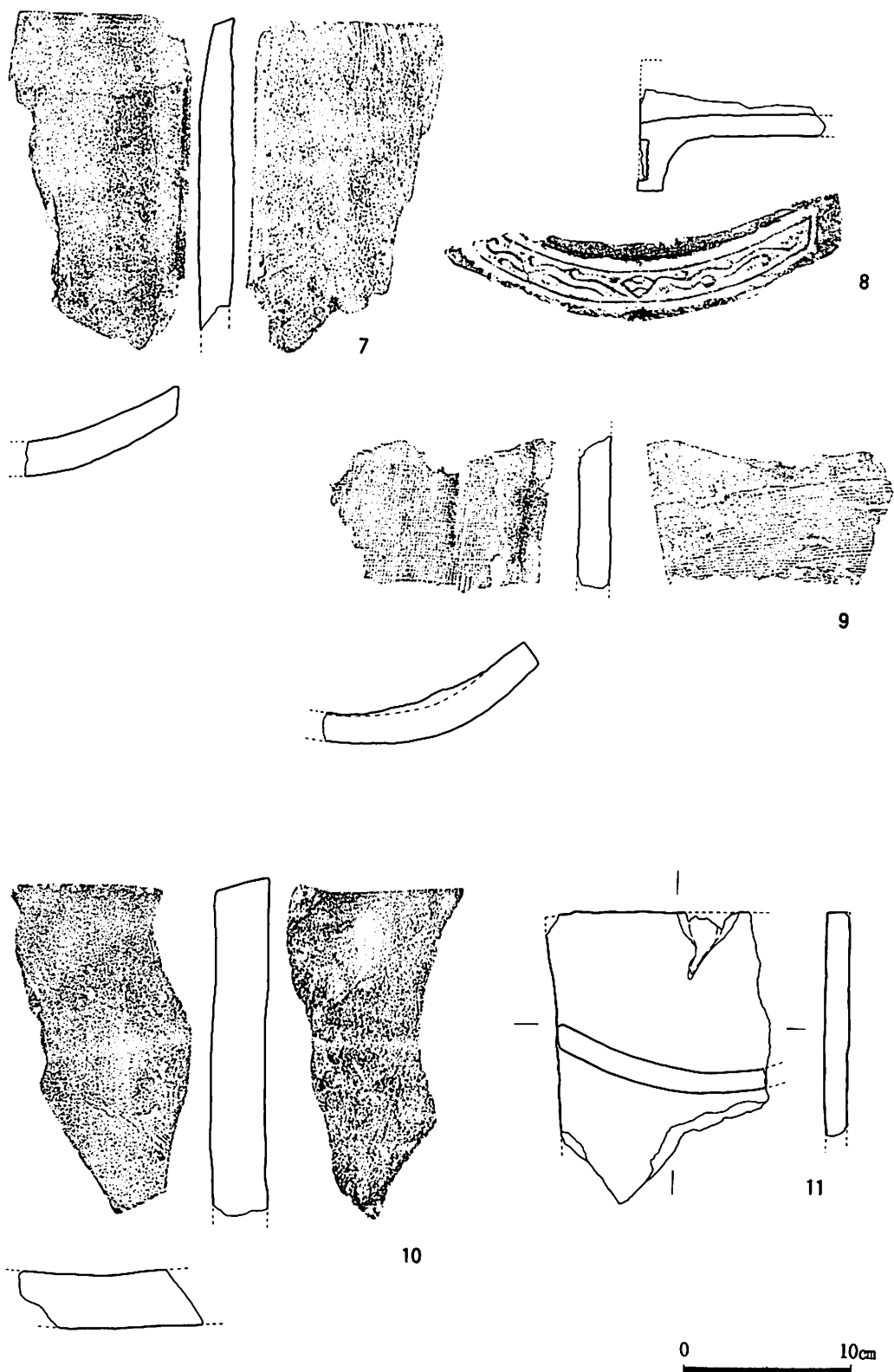
1類の40・43は底径6.2～6.4cmを測る。底部と体部下端との境にやや段を有し、体部への立ち上がりは緩やかである。外底は回転糸切り離した後ナデを施す。

2類の46は口径10.9cm、底径4.6cmを測る。体部の傾きはきつく直線的に立ち上がる。内面外面共に明瞭なロクロ痕を残す。

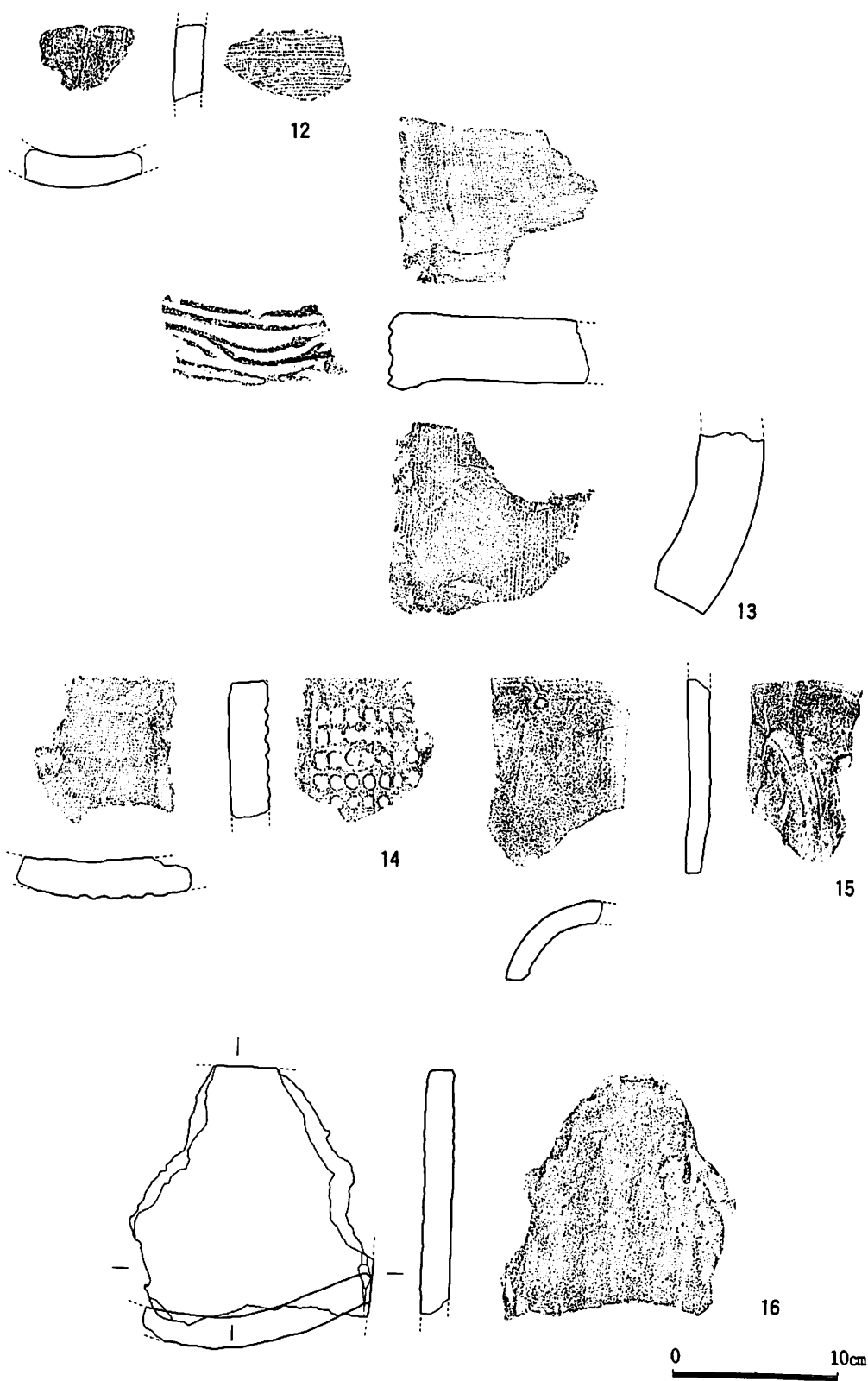
3類の52は口径13.2cm、器高2.6cmを測る。やや丸味かった底部から緩やかに立ち上がり、口唇部付近でやや外反する。



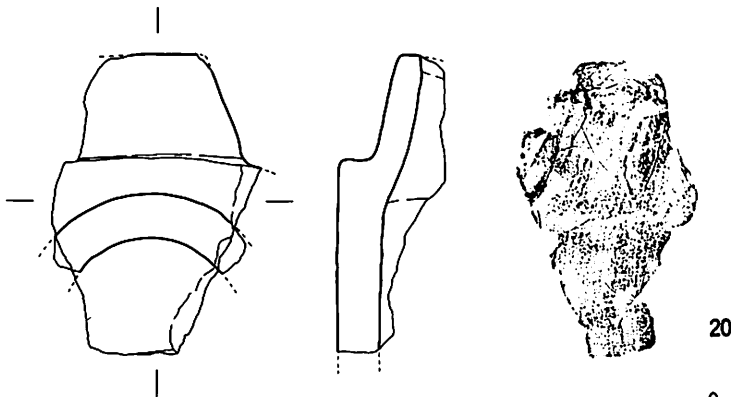
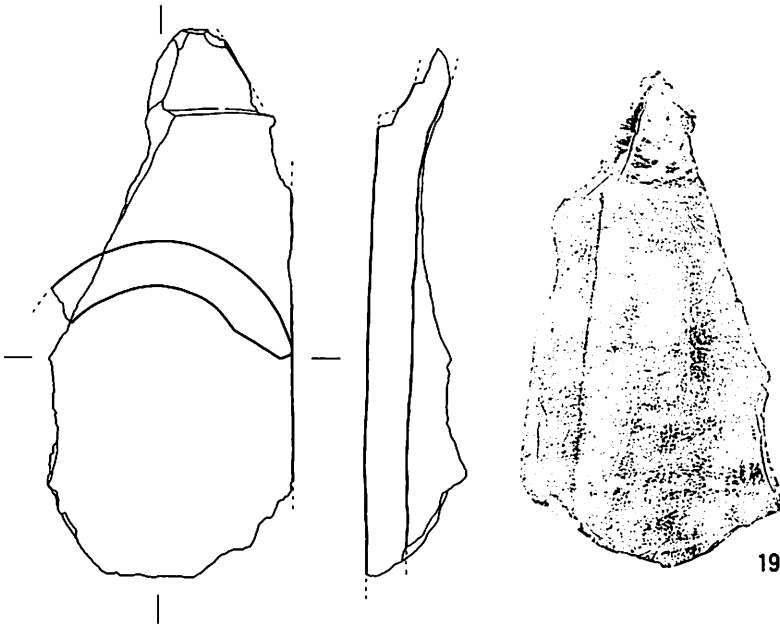
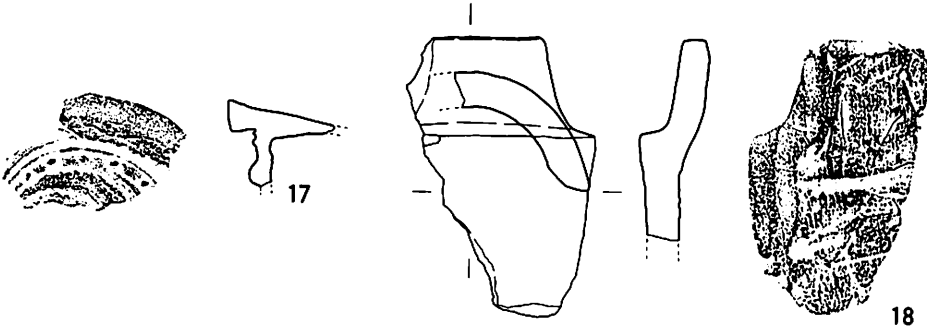
第14図 上野遺跡出土遺物実測図 (1) 平瓦



第15図 上野遺跡出土遺物実測図 (2) 平瓦・軒平瓦

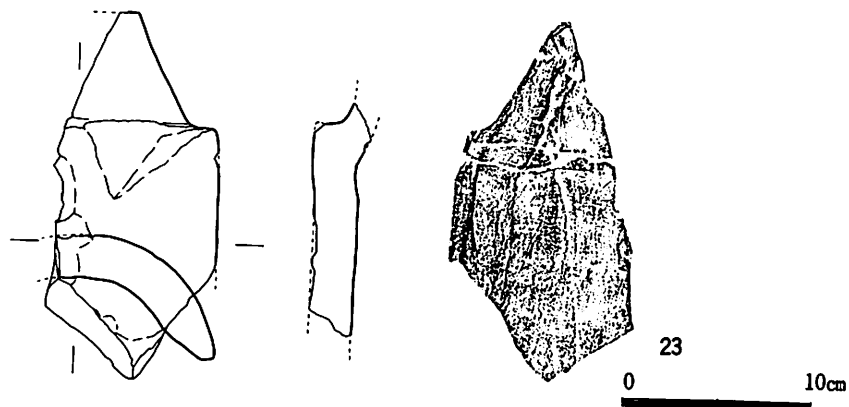
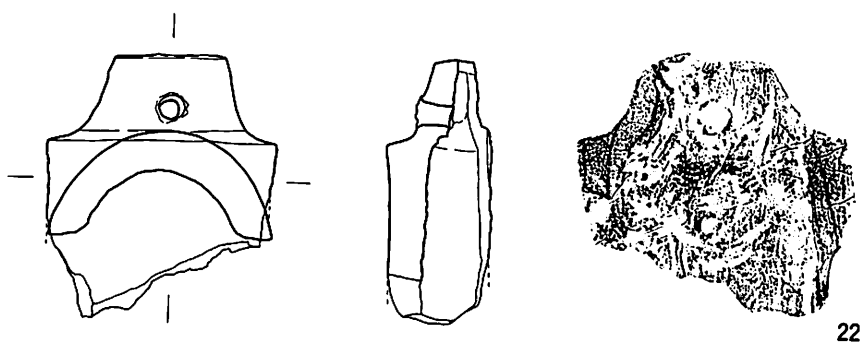
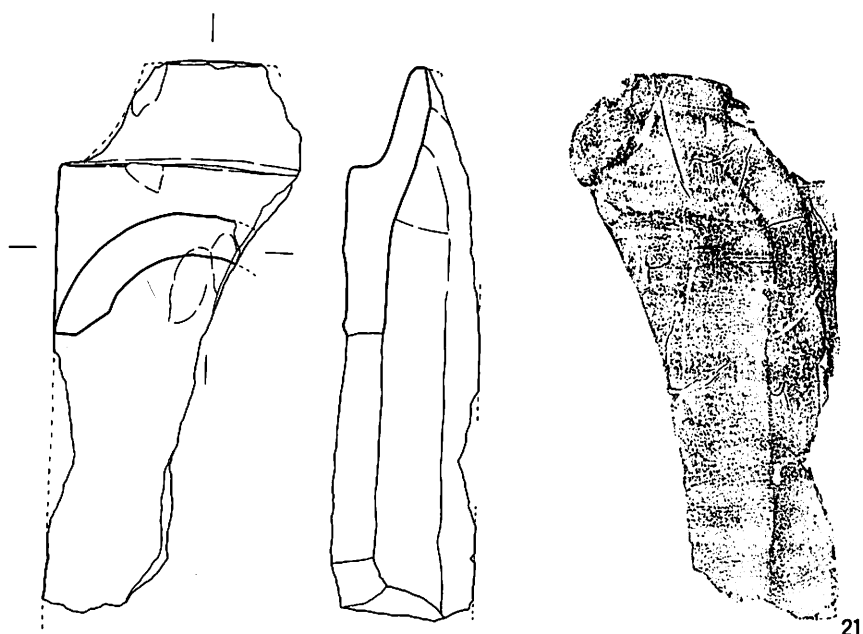


第16図 上野遺跡出土遺物実測図 (3) 平瓦・軒平瓦・丸瓦

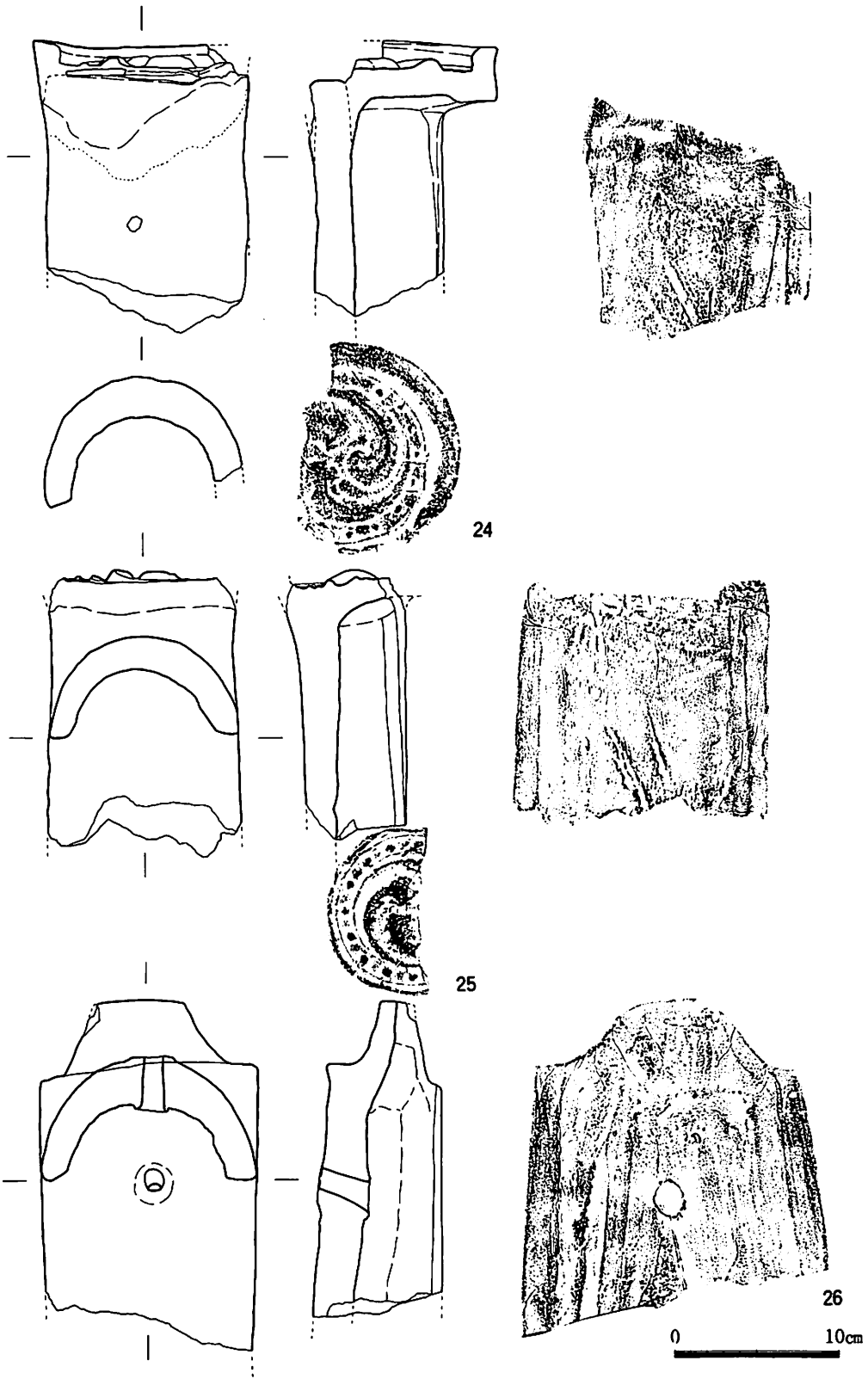


0 10cm

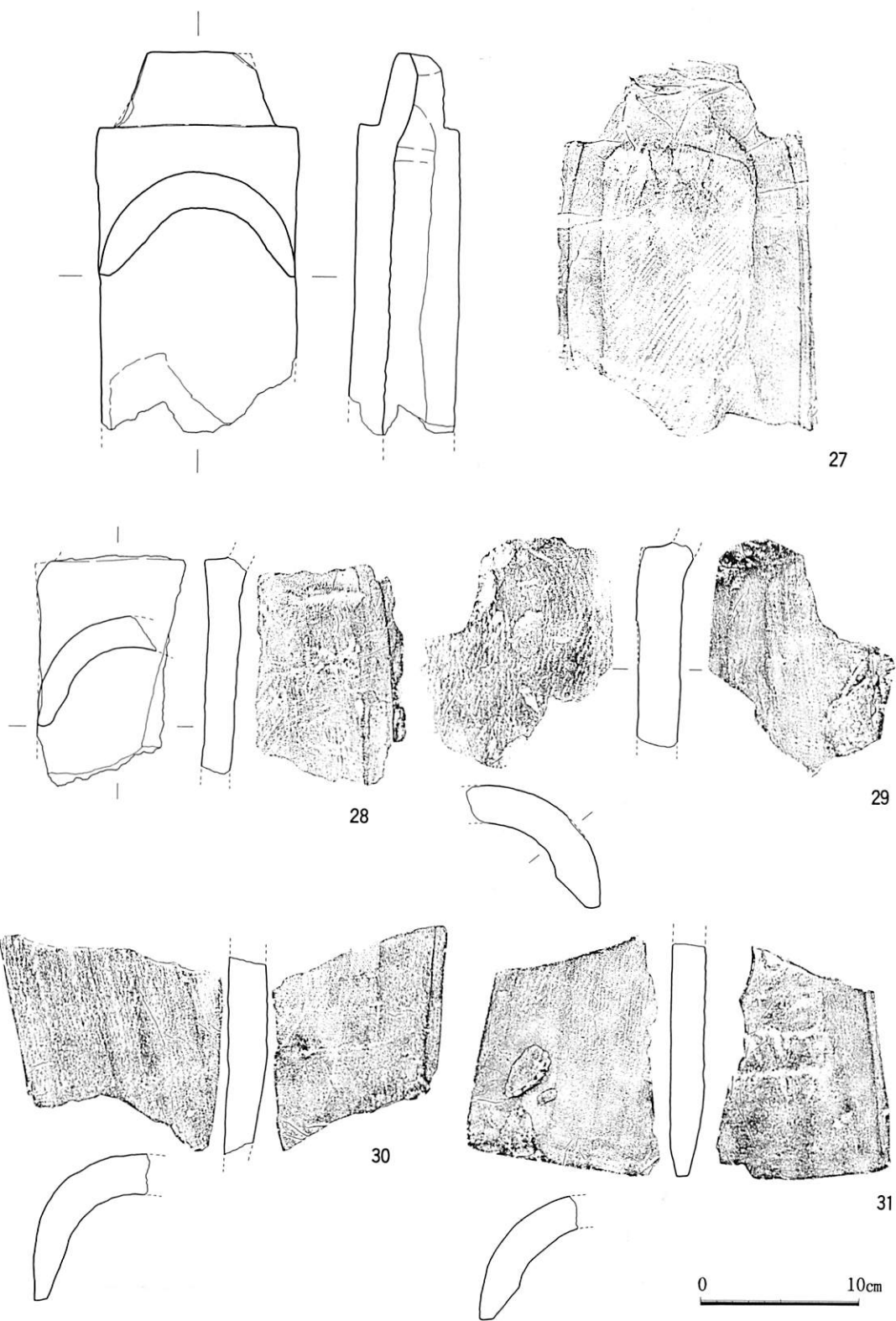
第17図 上野遺跡出土遺物実測図 (4) 軒丸瓦・丸瓦



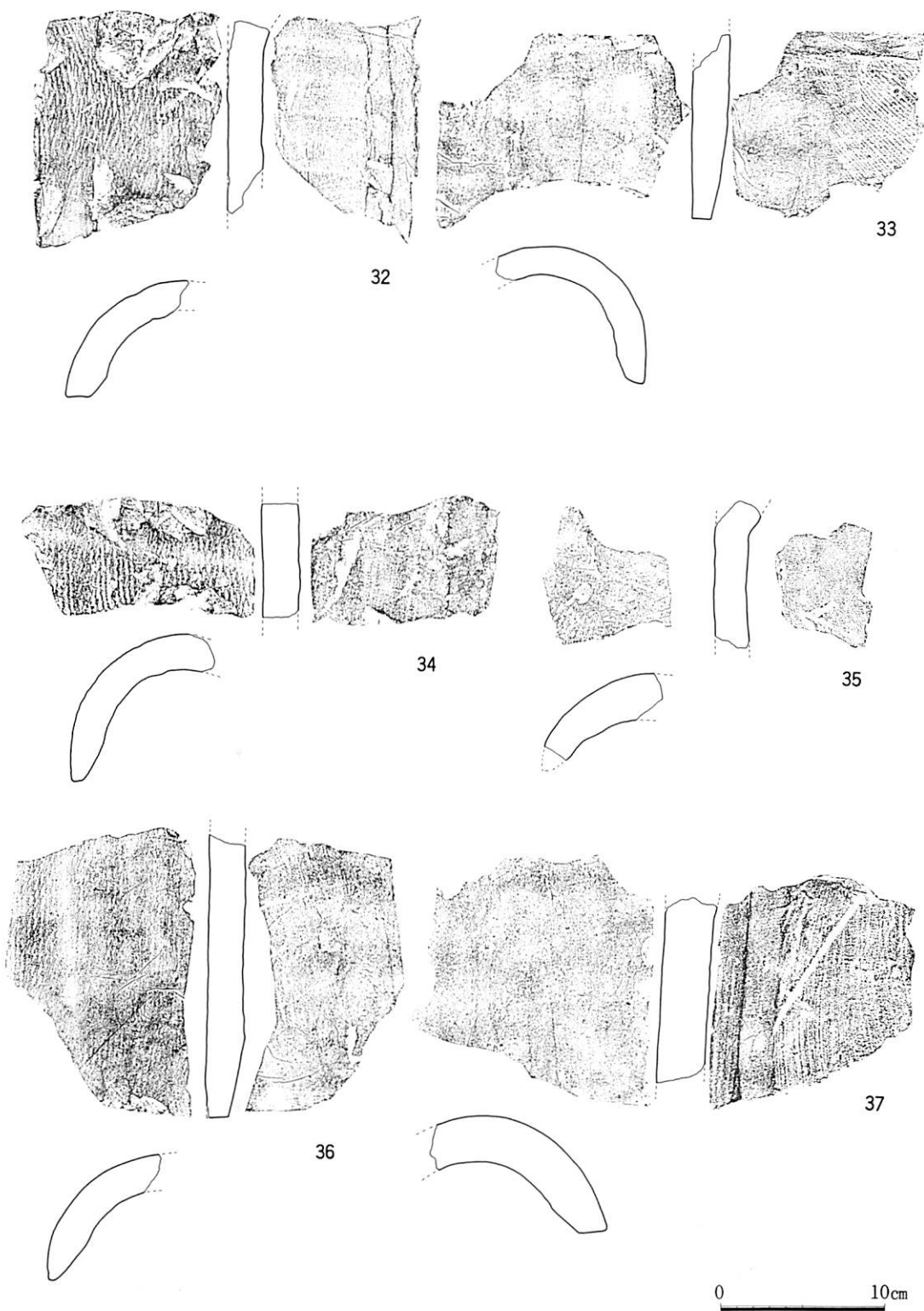
第18図 上野遺跡出土遺物実測図 (5) 丸瓦



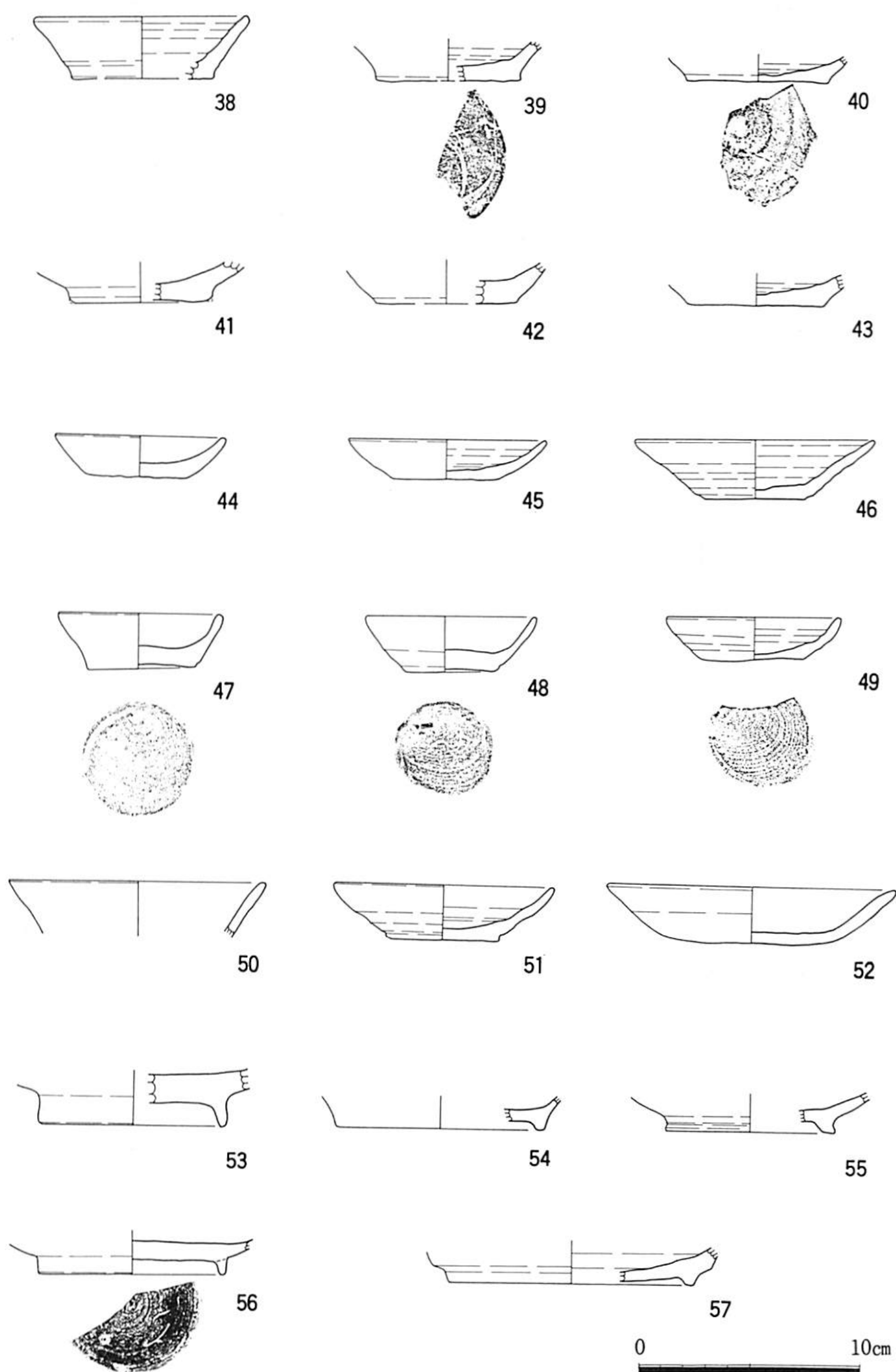
第19図 上野遺跡出土遺物実測図 (6) 軒丸瓦・丸瓦



第20図 上野遺跡出土遺物実測図 (7) 丸瓦



第21図 上野遺跡出土遺物実測図 (8) 丸瓦



第22図 上野遺跡出土遺物実測図 (9) 土師坏・皿

3、弥生土器～古式土師器

弥生土器はSK-12及び遺物包含層より出土している。

58は高坏で裾が広く開き、外面に赤色塗料を塗布している。59は甕の底部でやや上げ底気味である。60は壺形の平底気味の底部である。61は鉢の底部と思われる。底部は指によるつまみ出しで少し上げ底気味となっている。62は甕の底部であり、底部は稜をもつ小さな平底を形成するものである。63は脚部がやや高い作りとなっている。64の口縁部は緩やかに外反し、頸部に突帯を巡らす。65の鉢は口縁部が緩やかに外反し、広く開く胴部は殆ど張っていない。また、頸部に稜をつけて外反する口縁部をつくる。66の壺は口縁部の立ち上がりはやや外反し、頸部が「く」字状に屈曲する。体部外面は刷毛目調整を施し、内面はナデ調整を施す。67・68は頸部が「く」字状に屈曲し、外反しながら開き端部は少し角張っている。体部はほぼ球形に近く、丸底を呈する。器壁は薄く外面を刷毛目調整され、底部にかけてナデ調整が施されている。

4、摺鉢

本遺跡から出土する摺鉢は全て備前産である。中でもSD-01が最も多く、次いでSK-08から出土している。

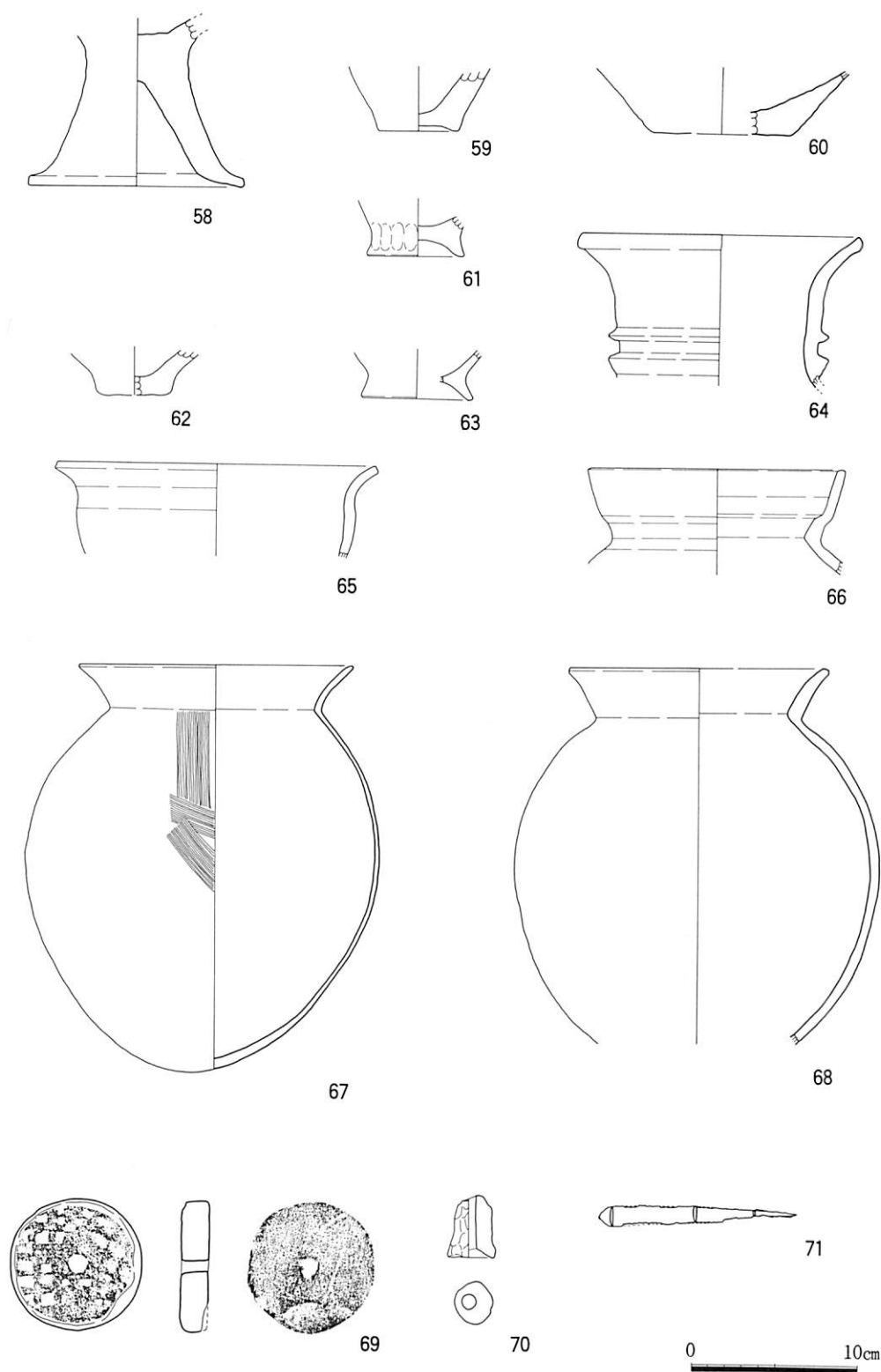
もっとも古く位置付けられる摺鉢は室町時代前半から中葉にかけてのもので、口縁部が直線的に立ち上がり口縁端の平坦面をわずかに拡張気味に作り口縁外面が「く」字状を呈するものである。

本遺跡ではこれに続く室町時代後半期に属する摺鉢が大半に認められる。器形は口縁部が大きく上方に立ち上がって拡張部上端に丸味を持たせた作りとなっている。

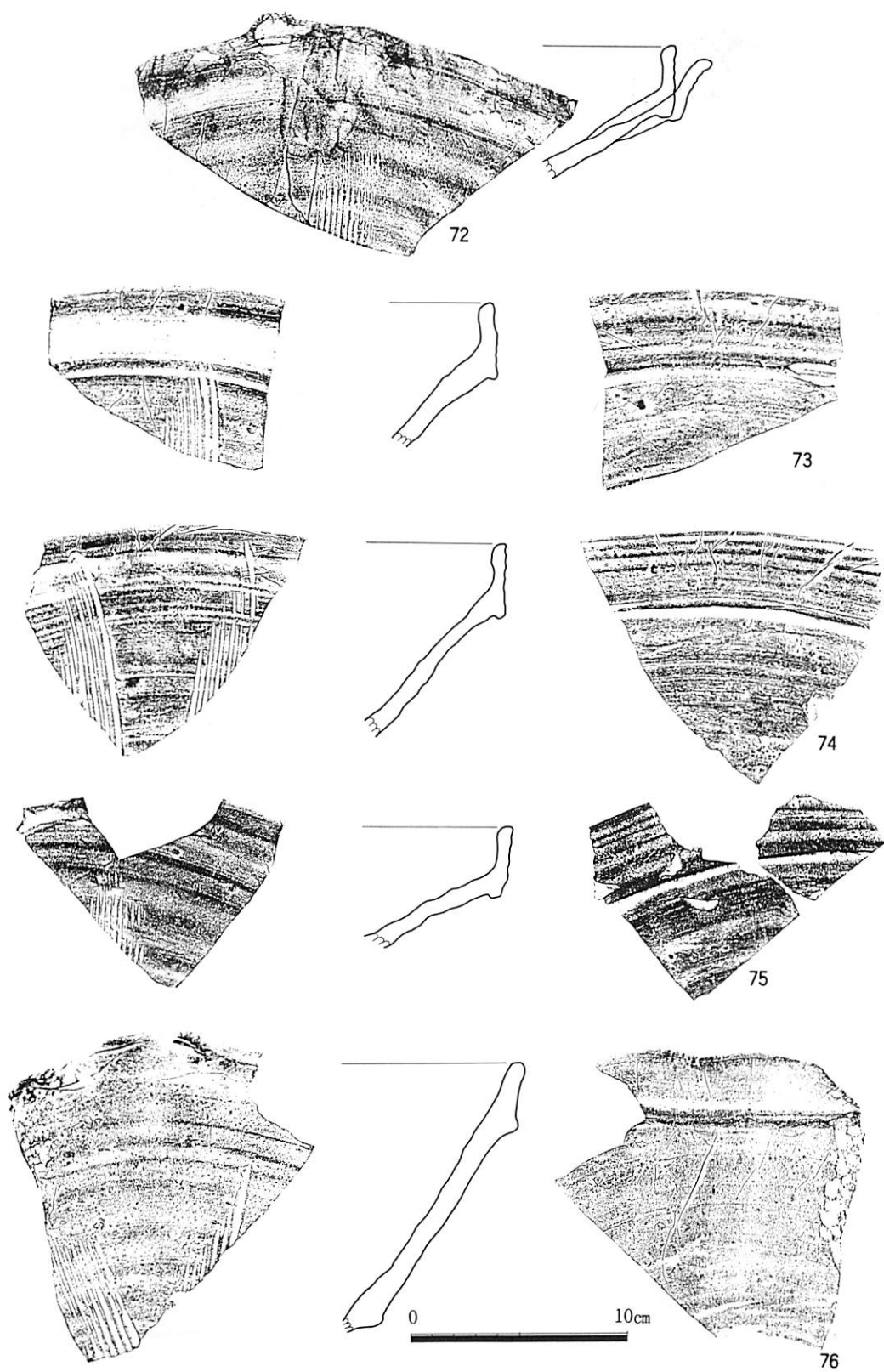
5、須恵器・土師器

須恵器並びに土師器はSD-01、SK-35より出土している。

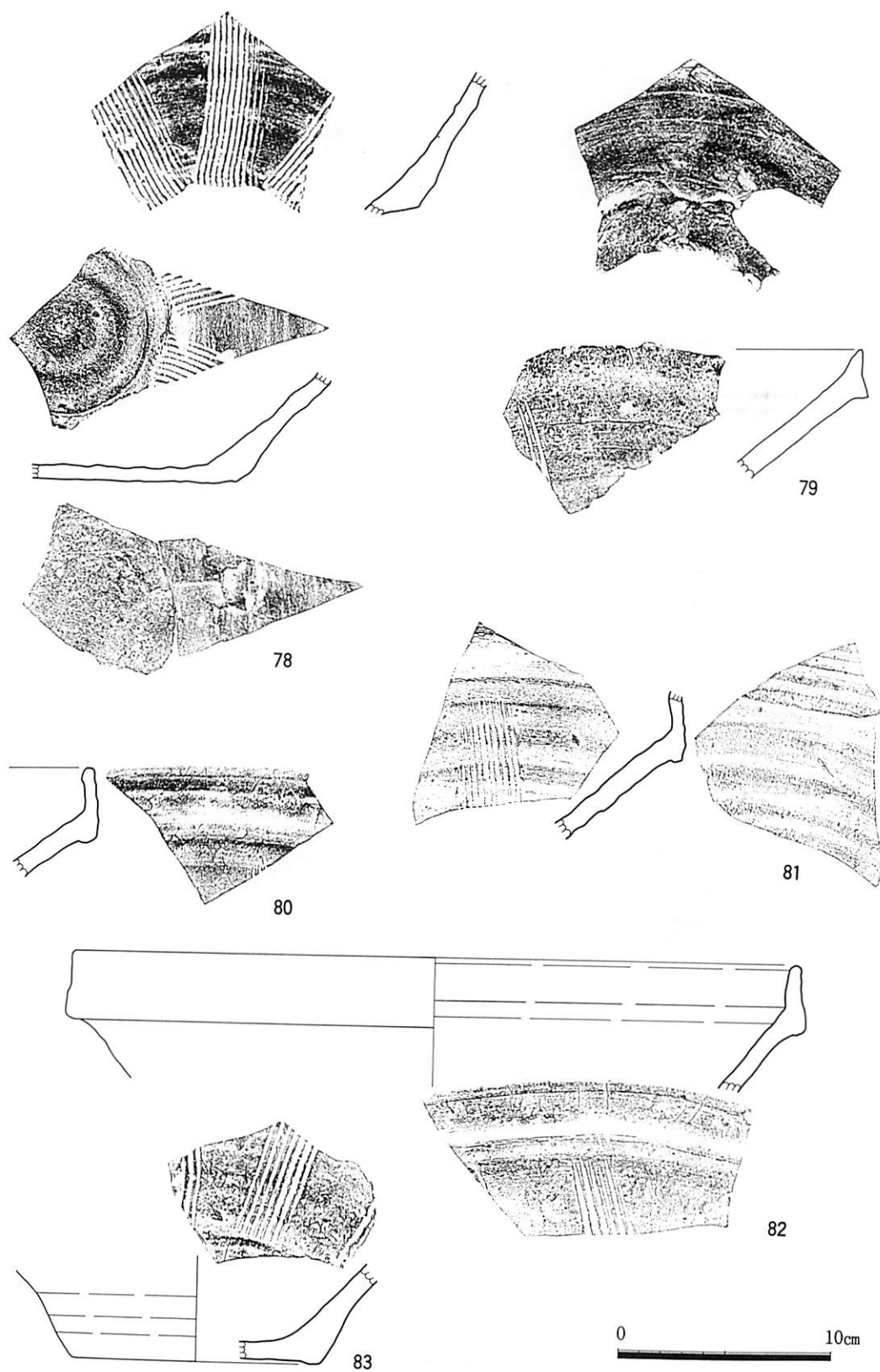
85は口縁部の端部が欠損しているものの、外傾する傾向にある。86は口縁部が「く」字状に屈曲し、2条の沈線を巡らす。口縁部は中位でやや内彎して口縁端部で平坦面を成す。胴部外面は粗い刷毛目、内面はナデを施す。88は体部の屈曲が緩く3カ所に2条の沈線をそれぞれ巡らす。90は体部に直交する口縁端部をもち、口縁端部は上下に若干広がる。91は頸部がやや外開き気味に立ち上がり口縁部玉縁状を呈する。頸部には2条の沈線を巡らす。



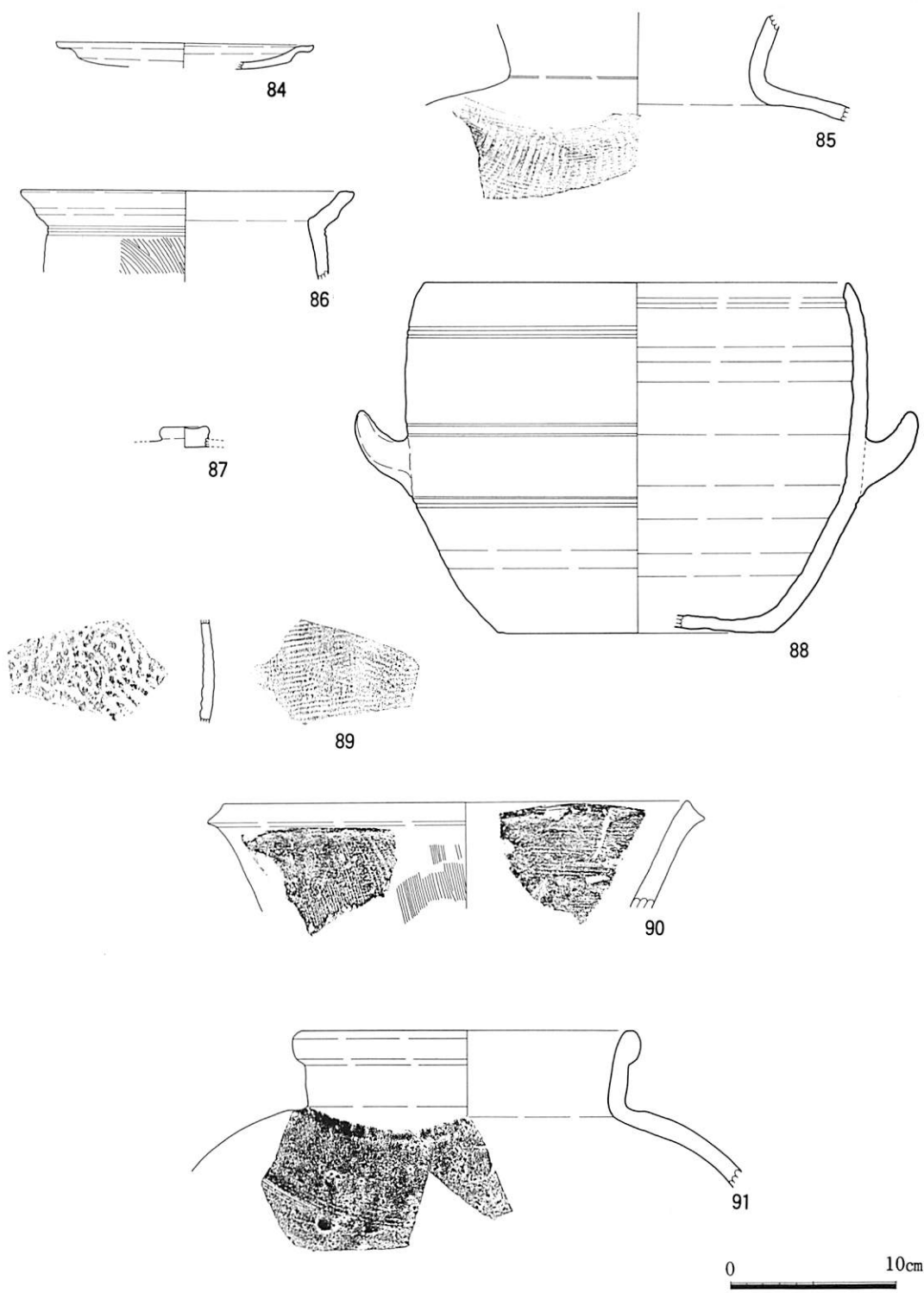
第23図 上野遺跡出土遺物実測図 (10) 弥生土器・古式土師器・紡錘車・土錘・刀子



第24図 上野遺跡出土遺物実測図 (11) 備前産播鉢



第25図 上野遺跡出土遺物実測図 (12) 備前産播鉢



第26図 上野遺跡出土遺物実測図 (13) 須恵器・土師器

第Ⅲ章 ま と め

今回の調査では溝のほか土塋、柱穴なども検出されたが、調査範囲、遺構の状況などから各々の関連性に不明な点を残している。このため、遺跡のひろがりや様相については今後の周辺部における調査の過程において明らかにしていきたい。このため本報告では遺構の状態と時期についての考察に留め、現況を時代順に通観していきたい。

遺跡の様相を時代順におってみるとまず弥生時代後期の遺構がみられる。SK-12・SK-04の土塋がこれであるが、遺構自体の性格は遺物の希薄や遺構の遺存状態が悪いことからつかむことが出来なかった。この時期の遺物（弥生土器）は遺構内のほかに遺構外の包含層より出土している。

これに次いで土師器を伴う遺構が存在する。SK-03・SK-11・SK-17がこれに該当するほか、SK-22・23・24・29・31・34においても出土しているが、出土状態が流れ込みの状況であり、どれもが碎片であるため時期の限定は困難である。但し、SK-03からは5世紀後半代のほぼ完形に近い土師器の壺が一点、埋納されたと思われる状態で出土していることから、この土器は供献的な性格として捉えることができよう。さらに土塋の形状が楕円形に近く一般的な土塋墓の形態を呈することから、土塋墓としての性格が考えられる。

次にSK-35の遺構内より8世紀中葉から後葉にかけての土師器の甕・須恵器の壺等が出土しており、遺構の形態は南北方向に長い隅丸長方形を呈するものである。なお遺構の性格については完掘していないこともあってこの場では差し控えることにする。さらに遺構以外に南側の包含層内からも須恵器の壺・土師器の蓋の碎片が出土している。

時代的にこの後に継続する遺構はなく、一挙に室町時代へと下る。遺構としてはSD-01・SE-01・SK-10・SK-13がこれに該当する。SD-01からは16世紀前半代の土師器の坏・皿を中心に出土し、中には室町時代前半代における軒先瓦が含まれているため、この時期を中心にした一定期間、恐らく寺院と推定される建造物が存在していたことを窺わせるに足るものである。SE-01もほぼSD-01と同時期に存在していたことが推察される。これらより時代がやや下ってSK-08・10・13の土塋が形成される。これらの土塋中には人頭大の石が多量に投げ込まれており、また土師質坏・瓦・摺鉢などの遺物も混在する。遺物から見てこの土塋の時期は室町後期に相当するものである。遺構の状況からこの時期に何らかの理由で整地若しくは開墾を行い、その際、廃棄用の土塋を掘ったものではないかと推定される。

なお遺物の中で注目されのは瓦類である。今回出土している瓦の内、平瓦の凸面には格子叩き目痕を、凹面には布目痕を施すものが見られる。この種の瓦は、SD-01・SK-08から出土している室町時代の瓦とは整形・焼成・調整が全く異なるものであり、様式からみて室町以前に製作されたことは間違いない。しかし遺構を伴わない事や軒平瓦が出土していないこともあって正確に時期を判別することは困難である。

なお、SE-01から出土している軒平瓦（13）について若干の所見を記しておく。この瓦は一見して瓦当部が均整唐草文様の退化したような模様を示しており、また軒の部分が段額になっており厚さ4.5cm程である。凸面は横方向に平行櫛搔き（2cm内におよそ12本）を施し、凹面は布目痕が見られる。この種類の瓦は当遺跡の北側に位置する上野遺跡においてこれまで数点表採されているが、時期についてはまだ明白になっていない。また百済系の素弁蓮華文とされる軒丸瓦も同一場所で表採されているが、遺構からセットで出土していないことや、軒平瓦の瓦当文様が著しく退化していることから現時点では同時期のものとは考えにくい。なお、太宰府系の瓦など九州における瓦とは系譜を異にしており時期を見いだせないが、今後、豊後の古瓦を研究する上で大変注目すべき資料であろう。

番号	出土区	器種	法 量			色 調	胎 土	調 整	備 考
			口径	底径	器高				
1	B-2グリッド No6	平 瓦				内・灰白色 外・暗茶褐色	砂粒 小石粒	凹布目 凸タタキ	
2	B-2グリッド No23	平 瓦				内・明黄褐色 外・明黄白色	2～3mm大の 微砂粒	凹布目 凸タタキ	
3	B-2グリッド No27	平 瓦				内・青灰色 外・淡灰黑色	砂粒 微石粒	凹布目 凸タタキ	
4	南側 包含層	平 瓦				内・灰白色 外・灰白色	緻密	凹布目 縫い目 凸タタキ	
5	I トレンチ	平 瓦				内・灰褐色 外・明黄褐色	砂粒 微砂粒	凹布目 凸タタキ	
6	II トレンチ	平 瓦				内・灰褐色 外・橙灰色	砂粒	凹布目 凸タタキ	
7	SK-13 No2	平 瓦				内・淡黒灰色 外・明灰褐色	砂粒	凹ナデ、はなれ砂使用 凸ヘラ削り	
8	SD-1 No63	軒平瓦				内・黒褐色 外・黒褐色	砂粒	凹ナデ 凸ナデ、ヘラ削り	
9	SD-1 No89	平 瓦				内・淡黒褐色 外・淡黒褐色	微砂粒	凹布目 凸刷毛目、縫い目接合	
10	SD-1 No61	平 瓦				内・灰黒褐色 外・黒灰褐色	小石粒	凹刷毛目 凸はなれ砂使用	
11	SD-1 No47	平 瓦				内・淡黄褐色 外・淡黄褐色	微砂粒	凹ナデ 凸刷毛目	
12	SK-2	平 瓦				内・淡灰黒褐色 外・灰褐色	白色微砂粒	凹布目 凸櫛掻き	
13	SK-2 No3	軒平瓦				内・黄橙色 外・黄橙色	砂粒	凹布目 凸横方向に平行櫛目	
14	SK-6 No1	平 瓦				内・淡黒灰色 外・淡黒灰色	砂粒	凹布目 凸タタキ、ナデ	
15	SK-8 No8	丸 瓦				内・淡黄白色 外・淡黄白色	微砂粒	凹刷毛目 凸ナデ	
16	SK-8	平 瓦				内・淡灰黑色 外・淡灰黑色	砂粒	凹はなれ砂使用 凸ナデ	
17	SK-8 No10	軒丸瓦				内・赤褐色 外・明橙褐色	微砂粒	凸ナデ 凹ナデ 瓦当部はなれ砂使用	
18	SK-10 No1	丸 瓦				内・赤褐色 外・橙褐色	砂粒	凹布目 凸ナデ、タタキ	
19	SD-1 No88	丸 瓦				内・灰黒褐色 外・灰褐色	砂粒	凹布目 凸タタキ、ナデ	
20	SD-1 No92	丸 瓦				内・黒灰色 外・灰白色	微砂粒	凸ナデ	
21	SD-1 D-1グリッド	丸 瓦				内・灰白色 外・灰白色	砂粒	凹布目 凸ナデ	
22	SD-1 No5	丸 瓦				内・明赤褐色 外・淡黒褐色	微砂粒	凸ナデ	
23	SD-1 No58	丸 瓦				内・淡黄褐色 外・淡黄褐色	砂粒	凹布目 凸タタキ、ナデ	
24	SK-8 No1	軒丸瓦				内・赤灰褐色 外・明橙黄色	砂粒	凹刷毛目、はなれ砂使用 凸ヘラ工具によるナデ	
25	SK-8 No5	軒丸瓦				内・橙褐色 外・明黄褐色	微砂粒	凹布目 凸ヘラ工具によるナデ	
26	SK-8 No9	丸 瓦				内・黄褐色 外・黄褐色	砂粒	凹ナデ、布目、ヘラ削り 凸ナデ、タタキ、ヘラ削り	
27	II トレンチ	丸 瓦				内・黒灰色 外・灰白色	砂粒	凹布目 凸ナデ	
28	B-3グリッド No45	丸 瓦				内・橙赤褐色 外・淡黒褐色	小石粒	凹布目 凸ナデ、タタキ	
29	SK-8	丸 瓦				内・淡灰黑色 外・灰白色	微砂粒	凹布目 凸ナデ、タタキ	
30	SK-2	丸 瓦				内・明灰黒褐色 外・明灰黒褐色	微石粒	凹布目、ヘラ削り 凸ナデ、タタキ	
31	SK-2 No2	丸 瓦				内・暗灰褐色 外・暗灰褐色	微砂粒	凹布目 凸タタキ	

遺 物 観 察 表 (1)

番号	出土区	器種	法 量			色 調	胎 土	調 整	備 考
			口径	底径	器高				
32	SD-1 No35	丸 瓦				内・黒灰色 外・黒灰色	砂粒	凹布目 凸タタキ	
33	SD-1 No83	丸 瓦				内・褐色 外・灰黒褐色	砂粒	凹布目 凸ナデ	
34	SD-1 No74	丸 瓦				内・赤褐色 外・赤褐色	砂粒	凹布目 凸タタキ	
35	SD-1 No86	丸 瓦				内・灰白色 外・灰白色	小石粒	凹布目 凸ナデ、刷毛目	
36	SD-1 No93	丸 瓦				内・淡黄褐色 外・淡黄褐色	砂粒	凹布目 凸タタキ	
37	SD-1 No6	丸 瓦				内・淡黒褐色 外・淡灰黒褐色	微砂粒	凹布目 凸ナデ	
38	SD-1 No39	土師質 皿	9.8	6.4	2.8	内・明黄褐色 外・明黄褐色	微砂粒	内外共に明瞭なロクロ痕を残す 底部は回転糸切り離し	
39	SD-1 No48	土師質 皿		6.6		内・白黄褐色 外・橙色	砂粒	内外共に明瞭なロクロ痕を残す 底部は回転糸切り離し後ナデ	
40	SD-1 No81	土師質 坏		6.4		内・白黄褐色 外・白黄褐色	砂粒	内外共に明瞭な回転利用の横ナデ 底部は回転糸切り離し後の一定方向のナデ	
41	SD-1 No7	土師質 皿		6.6		内・灰黒褐色 外・黒褐色	砂粒	内面、底面共に不定方向ナデ 外面ナデ	
42	SD-1 No43	土師質 皿		6.4		内・灰黒褐色 外・黒褐色	砂粒	内面、底面共にナデ	
43	SD-1南側	土師質 坏		6.2		内・橙色 外・褐色	微砂粒	内外共に回転利用の横ナデ 底部は回転糸切り離し	
44	SD-1 No82	土師質 皿	7.8	4.6	1.8	内・白黄褐色 外・褐色	砂粒	内外共に回転利用の横ナデ 底部は回転糸切り離し後ナデ	口縁部にスガ 付着
45	SD-1 No84	土師質 皿	9.0	4.8	1.8	内・白黄褐色 外・白黄褐色	砂粒	内外共に回転利用の横ナデ 底部は回転糸切り離し	
46	SD-1 C-2グリッド	土師質 皿	10.9	4.6	2.7	内・橙褐色 外・橙褐色	砂粒	内外共に明瞭なロクロ痕を残す 底部は回転糸切り離し	
47	SK-2 No5	土師質 皿	7.5	5.0	2.5	内・淡黄色 外・淡黄色	微砂粒	内外共にナデ 底部は回転ヘラ削り後、一定方向のナデ	
48	SK-13 No3	土師質 皿	7.8	4.0	2.5	内・橙褐色 外・橙褐色	微砂粒	内外共に回転利用のナデ 底部は回転糸切り離し後ナデ	
49	SD-1 No56	土師質 皿	8.0	4.8	2.0	内・橙色 外・褐色	砂粒	内外共に明瞭な回転利用の横ナデ 底部は回転糸切り離し	
50	SK-2	土師質 坏	11.8			内・明橙褐色 外・明橙褐色	微砂粒	内外共に横ナデ	
51	I トレンチ	土師質 皿	10.0	3.2	5.0	内・橙褐色 外・橙褐色	砂粒	内外共に回転利用による横ナデ 底部は回転糸切り離し後、ナデ	
52	I トレンチ	土師質 坏	13.2	8.3	2.6	内・黒灰色 外・淡黄白色	微砂粒	内外、外底共に一定方向のナデ 体部内外共に横ナデ	
53	SK-2	陶器碗				内・緑釉 外・緑釉	緻密	内外共に回転利用によるナデ	断面＝灰黄褐色
54	SD-1 No30	土師質 坏		9.4		内・茶褐色 外・褐色	微砂粒	内外共にナデ	
55	SD-1 No66	土師質 坏		7.6		内・黄白褐色 外・橙褐色	砂粒	外面は回転利用による横ナデ 底部は高台の張付け後、ヘラ工具によるナデ	
56	南側包含層	土師質 坏		8.6		内・灰褐色 外・灰褐色	微砂粒	内外共に回転利用による横ナデ 底部はヘラ工具によるナデ	
57	南側包含層	土師質 坏		11.0		内・黄茶褐色 外・橙褐色	微砂粒	内面は回転利用によるナデ	
58	SK-12 No1	弥生 高 坏		13.0		内・黄白色 外・黄白色	砂粒	外面はタテ方向のナデ 内面は不定方向のナデ	外面一部に赤色 塗料塗布
59	SK-12	弥生 甕		5.0		内・黄白褐色 外・黄白褐色	砂粒	内外共にナデ	
60	SK-12	弥生 壺		8.0		内・淡黒褐色 外・橙褐色	砂粒 小礫	内外共にナデ	
61	B-2グリッド No38	弥生 鉢		5.7		内・黒灰色 外・赤褐色	砂粒	外面はナデ、一部に刷毛目 底部は指によるつまみ出し	少しあげ底気味
62	南側包含層	弥生 甕		4.6		内・白黄色 外・白黄色	砂粒	内外共にナデ	

遺 物 観 察 表 (2)

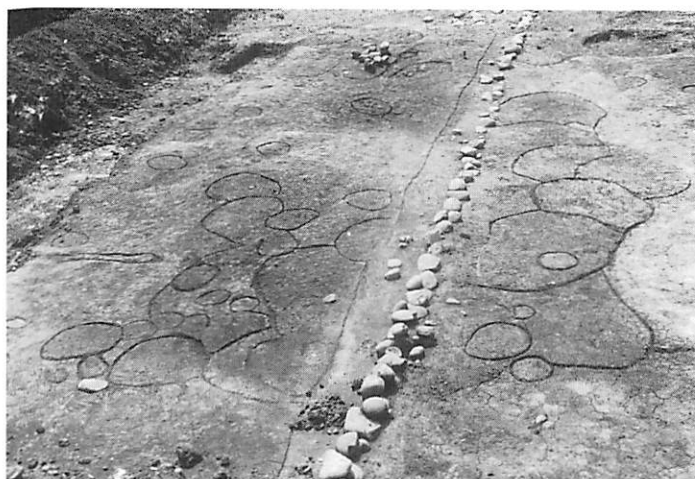
番号	出土区	器種	法 量			色 調	胎 土	調 整	備 考
			口径	底径	器高				
63	南側包含層	弥生		6.6		内・淡灰黒褐色 外・明赤褐色	砂粒	内外共にナデ	
64	B-2グリッド No16	弥生 壺	17.0			内・灰黒色 外・赤褐色	研粒	内外共にナデ	
65	南側包含層	弥生 鉢	19.4			内・灰白色 外・赤灰色	砂粒	内外共にナデ	
66	SK-17 No1	土師 壺				内・橙褐色 外・橙褐色	砂粒	口縁部内外共に回転利用の横ナデ 体部は刷毛目	
67	SK-3 No5	土師 壺				内・黄白色 外・黄白色	砂粒	口縁部内面外面下位はナデ 外面上位は刷毛目	
68	I トレンチ	土師 壺				内・淡黄白色 外・淡橙白色	砂粒	口縁部内面外面下位はナデ 外面上位は刷毛目	
69	南側包含層	紡錘車				内・灰白色 外・灰白色	微砂粒	全体を研磨 瓦の二次的使用	直径=7.8cm
70	SK-8 No2	土 鍾			3.8	黒灰色		手ぐすね作りで指圧痕あり	
71	SD-1	刀 子							青銅製
72	SD-1 No57, No4	備前 擂鉢				内・赤褐色 外・明赤褐色	緻密	内外共に回転利用によるナデ	樋目1単位11本 口縁沈線5条
73	SD-1 No10	備前 擂鉢				内・暗灰褐色 外・暗赤褐色	緻密	内外共に回転利用によるナデ	口縁沈線2条
74	SD-1 No77	備前 擂鉢				内・茶褐色 外・灰褐色	緻密	内外共に回転利用によるナデ	樋目1単位6本 口縁沈線5条
75	SD-1 No2, No14	備前 擂鉢				内・明赤褐色 外・淡黄褐色	緻密	内外共に回転利用によるナデ	樋目1単位10本 口縁沈線5条
76	SD-1 No75	備前 擂鉢				内・黒褐色 外・灰褐色	緻密	内外共に回転利用によるナデ	樋目1単位8本
77	SD-1 No76	備前 擂鉢				内・明赤褐色 外・赤褐色	緻密	内外共に回転利用によるナデ	樋目1単位11本
78	SD-1 No90, No91	備前 擂鉢				内・明赤褐色 外・明赤褐色	緻密	内外共に回転利用によるナデ	樋目1単位11本
79	SK-2 No7	備前 擂鉢				内・暗茶褐色 口縁部・赤褐色 胴部・赤褐色	石英	内外共に回転利用によるナデ	
80	SK-8 No13	備前 擂鉢				内・暗赤褐色 外・明赤褐色	緻密	内外共に回転利用によるナデ	口縁沈線4条
81	SK-8	備前 擂鉢				内・明赤褐色 口縁・暗灰褐色 胴部・明赤褐色 一部淡黄褐色	緻密	内外共に回転利用によるナデ	自然軸あり 内面の樋目1単位11本
82	SK-8 No3	備前 擂鉢	54.4			内・暗赤褐色 外・黒褐色	緻密	内外共に回転利用によるナデ	内面樋目1単位6本 口縁沈線1条
83	SK-8	備前 擂鉢				内・暗茶褐色 外・暗黒褐色	緻密	内外共に回転利用によるナデ	樋目1単位7本
84	SD-1 No34	土師器 皿	15.8			内・白黄褐色 外・赤褐色	砂粒 2～ 3mmの白色 小石粒	内外共に回転利用によるナデ	
85	南側包含層	須恵器 壺				内・浅灰黒色 外・浅灰黒色	微砂粒	口縁部内外共に回転利用によるナデ 肩部外面は並行タタキ	
86	SK-35	土師器 甕	20.4			内・黄白色 外・黄白色	砂粒 (2～3mm大)	内外共に回転利用による横ナデ 体部は荒い刷毛目	頸部に2本の沈 線
87	南側包含層	土師器 壺				内・黄白褐色 外・黄白褐色	微砂粒	内外ナデ	
88	SK-35 No4	須恵器 鉢	26	16.8	21.3	内・青灰色 外・灰褐色	微砂粒	内外共に回転利用による横ナデ 底部はヘラ削りと指ナデ	手ぐすねの把手
89	SD-1 No101	須恵器 壺				内・灰白色 外・緑灰色の釉	緻密	内面は同心円文多キ 外面は平行タタキ後ナデ消し	
90	南側包含層	土師質 鉢	30.8			内・黄白褐色 外・黄白褐色	砂粒	内面は回転利用による横ナデ 外面はタテ方向の刷毛目	
91	SK-10 No6, 7, 8	備前 壺	21.2			内・黄褐色 外・赤褐色	緻密	内外共に回転利用によるナデ	肩部に4条の沈 線

遺 物 観 察 表 (3)

写真図版



北側より遺跡を望む



東側部分 遺構検出状況



北側部分 遺構検出状況



SK-03 (南側より)



SK-03 遺物検出状況



SD-01 (南側より)



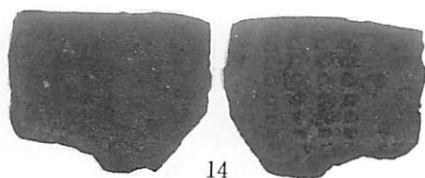
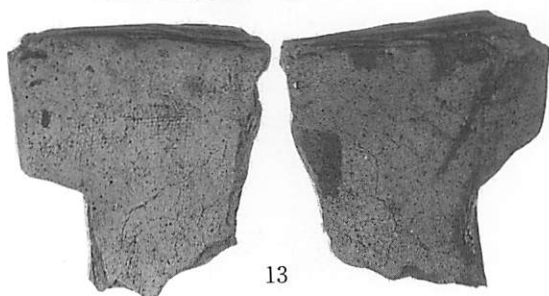
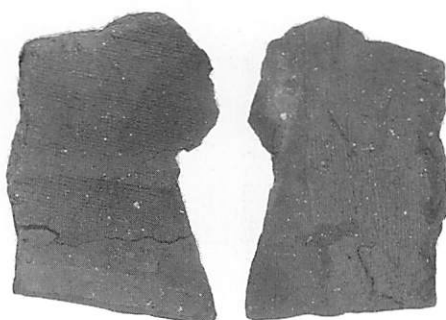
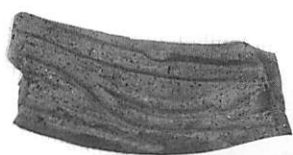
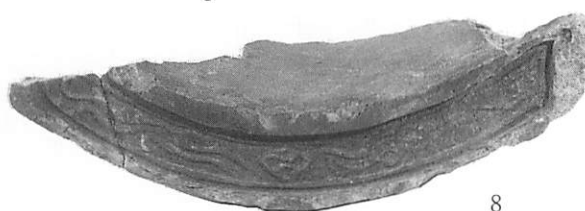
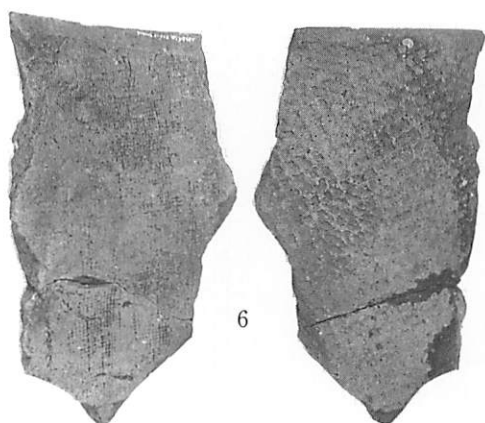
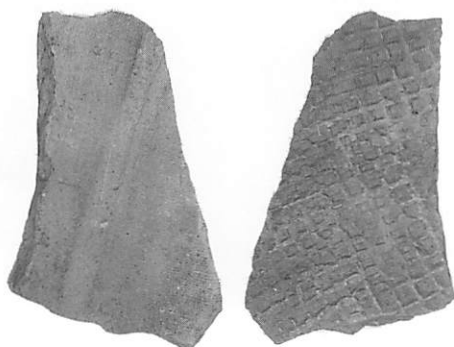
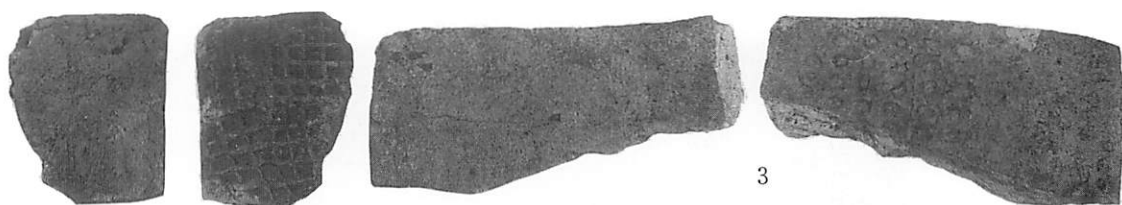
SK-08 (南側より)



SK-10 (南側より)

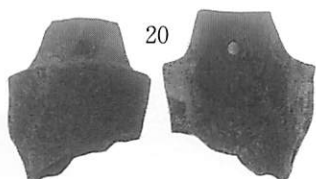


SK-13 (南側より)

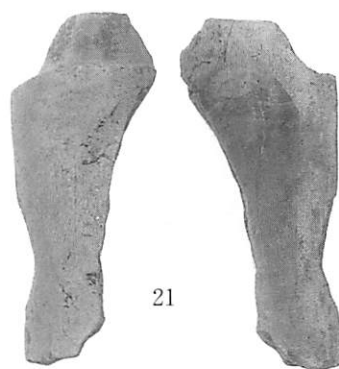




19



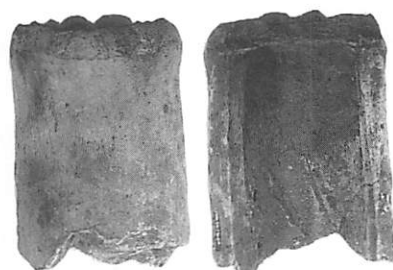
20



21



24



25



26



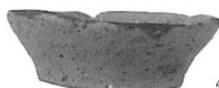
27



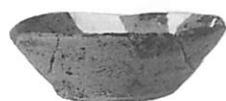
44



45



47



48



49



51



52



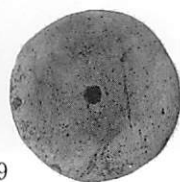
53



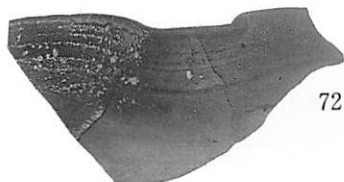
58



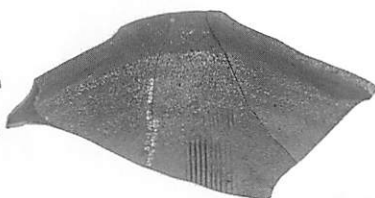
68



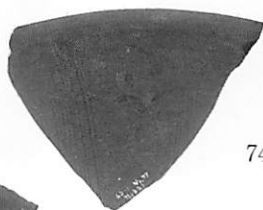
69



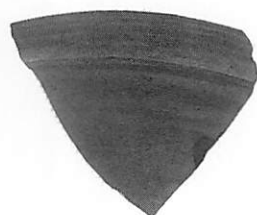
72



76



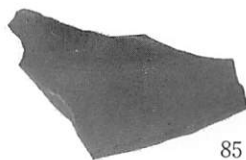
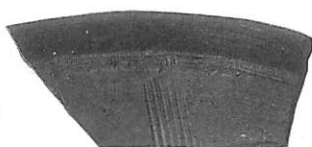
74



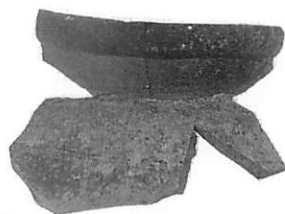
77



82



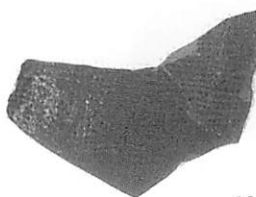
85



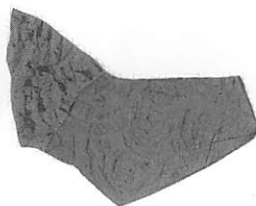
91



88



89



上 野 遺 跡

1991年9月

発 行 大 分 市 教 育 委 員 会
印 刷 株 式 会 社 新 郷 印 刷 所
